
高校生活と探し物

撫子 雪姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生活と探し物

【Nコード】

N8746Z

【作者名】

撫子 雪姫

【あらすじ】

非日常な日々と探し物。いろいろなことに巻き込まれていく彼の運命は・・・・？

入学試験と拷問（前書き）

初めてですので、お手柔らかにお願いします。

入学試験と拷問

こ、ここが俺の受験の高校、ああ高校（仮）かぁ・・・

ん？（仮）って…まだ名前が決まってないのかな？

そうなら適当すぎるだろ・・・

先生に勧められて入ったんだけど、どういう高校なのか、謎だ。

ネットで調べても、都市伝説ばかりだし・・・

都市伝説によると、頭や運動神経がかなりいい人たちが集められるとか・・・

この先不安だ。

俺はその不安を振り払って、試験会場へ向かった。

試験会場に入ると、重苦しい雰囲気俺を襲った。

プレッシャーというか、なんというか、とにかく空気が張り詰めている。

ここから早く逃げ出したいくらいの空気が俺の具合を悪くする。

・・・腹が痛い。

うわ、最悪。こんなときに・・・

と・・・トイレに行こう！今ならまだ間に合う！！・・・気がする！！

ジャー――

「ふう・・・今何ぞっつ！！やばっ！！10秒前だし！！」

この時計は正確なのかどうか知らねえけど、完全に遅れる！！

俺は全力で走った。走りまくった。

ガラッ

「セ．．．セーフ？．．．なの．．．．．か？」
しーしーん

うう．．．アウトか？

「早く席に着け、天神どくろくアマガミ ドクロく」
セーフ？ セーフなのか？

まあいいか。とにかく座ろう。

「私は担当の希咲遙くキサキ ハルカくだ。」

おお、よく見たら超美人。

「では、今から筆記試験を開始する。ヘタな真似をしたら即失格だ。
いいな？」

プリントが配られる。

「開始っ！！」

バツ

おお！？なんだこれ！？超難しいじゃねえか！！普通なら絶対に解
けねえぞ！！

． だが俺は普通ではない！天才秀才天神どくろく様だ！

．

・
筆記試験が終わるころには、俺はゲッソリになっていた。

「な・・・なんなんだあの問題は・・・拷問並みに難しいぞ・・・」

「おい！まだバテるなハゲ！！次はもつときついのあるんだぞ」

・・・え？

「ふん、聞いて驚け。いや、これを聞いて驚かない者はいない。いや、すこしはいるかもしれんが・・・」

な、なんだ？

「体力試験だ！！」

へえー・・・ふえ？た、体力試験だと？そんなの聞いてねえよっ！！

「ふふふ、私には見えるぞ。貴様らのバテる姿が。」

いやいやいやいやまじで無いわーまじありえねえしーマジ聞いてねえしー

「さあ、移動するぞ。体育館に」

続く

入学試験と拷問（後書き）

かなり読みづらいと思いますし、ヘタクソだと思います。
最後まで読んで下さった方、ありがとうございます。

入学試験と拷問2（前書き）

書けるときは書かないとって思ってた話目です。

入学試験と拷問2

た・・・体力試験だと!?

も、もちろんやってやるさ!母ちゃんに約束したからな!
長い廊下を歩いて2分。ようやく体育館についた。

「よく聞け。今から3人一組のパーティーを作ってもらふ。好きな相手でも何でもいい。」

え。よく見たら知ってる人いませんけど。これ俺残るパターンじゃね?

「ん、じゃあもう組んでいいぞ。必ず3人一組な。確実に余らないからな。制限時間10分。」

や、やってやるぜ!!余らないんだからな!

たぶんこれは積極性とかいろいろ見られると思うぞ!俺的に。

まあまずは、なんかみんなに話しかけられなくてモジモジしている女の子に限る!!なんかかわいいし

と思ったらさっそく発見!!ポニーテールの茶髪の女の子!かわいい!!ものすごく!!

あの子すげーモジモジしてるぞ。

とりあえず話しかけてみるか。

「あ、あのー俺と一緒に組みませんか?あ、無理ならいいんだけど・・・」

「えー?嘘!!本当ですか!?!ありがとうございます!!誰にも話しかけられなくて、もう無理かと思いました(ニコッ)」

か、かわええ／＼／＼

「名前、なんていうんですか？あつ私、春色咲楽くハルイロ サクラ>っていいいます」

「俺は、天神どくろ」

すごく魅力的な名前だ。咲楽ちゃんの雰囲気こそつくりだ。

「私、同じ学校の人連れてきますので、少し待っててください」

咲楽ちゃんは大きく息を吸うと、精いっぱいので、

「巻くうー！ー！ー！ん！ー！ー！」

4秒後

「なんだ？」

「さっすが巻君！早いね！俊足だね！」

お、黒髪セミロングのナイスガイだ。

「どくろくん！紹介するね。巻蓮くマキ レン>君！おさななじみだよ」

いつのまにか咲楽ちゃんがタメ語になつてゐる！すげー嬉しいんですけどー！！

「あのね、巻君、一緒に組んでくれるよね？」

「あ、あたりまえだ。」

こいつ、咲楽ちゃんの可愛さに一撃でやられたな

「よろしくなっ！蓮っ 俺の名前は、「天神どくろだろ。」

う、あの腹痛事件（？）で一氣に目立ってしまったか。

「あ、言い忘れてしまっていたが、パーティーが組めた次第、あそこの受付で登録してもらえ。」

おいおいおいおい、言い忘れるなよな。試験管だろ。一応。

「さ、パーティーも組めたところだし、さっそく登録しに行くか。」
「いえっさあー！」

おい待て、なぜ貴様が仕切っている。ま、いいけどな。

「そうだなっ。さ、行こうぜ！」

・

・

・

「よし、これで全員組めたな。ドアを開けたらアスレチック的なものが待っている。ゴールまでパーティー全員でたどり着くんないかな？」

よし、気合入れいくぜえー！！！！

続く

入学試験と拷問2（後書き）

最後まで読んで下さった方、ありがとうございます。
一瞬でも読んで下さった方もありがとうございます。

入学試験と拷問3（前書き）

3話目です。

よろしくおねがいます。

入学試験と拷問3

ガチャ

体育館の扉が開かれた。

・・・広つつつ!!

どれくらい広いかというとものすごくおおおおおおく広い!!

その体育館の中になんか大きいアスレチック的なものがあった。

それもまた、ゴールが見えないほどの大きさだ。

たぶんトラップなどという仕掛けもあるのだろう。

「ゴール、できるかなあ？」

「大丈夫じゃね？何とか」

頑張れば何とかなる!! たぶん・・・

「お前、頑張れば何とかなる!!・・・とか考えてないよな？」

「う・・・計画的に頑張ればいいと思います。」

何だこいつ！読心術でも使えるのか!?

「では、行くぞ！フライングはなしだからな。」

OK!! 遥先生。

「よーい・・・ドン！」

遥先生の掛け声により、いつせいに全員が走り出した。

・
・
・
「チームワークを乱すなよ。ゴールの為にな（ニヤリ）」

「くっそ！超きっつい！！」

ずっと上るのばっかで、超疲れるんですけど！！

「疲れるね（ニコッ）」

咲楽ちゃん、全然疲れているように見えませんか？

おまけに蓮なんかは顔色一つ変えやしない。

くそっ腹立つ！

「うおおおおおおおおお！！！！」

「おい！いきなりペースを上げるなバカ！！はぐれたらどうするつもりだ！」

「なっなんだよ！いいじゃねーかよ」

「どこがいいのかさっぱりわからないなバカ！」

「なっバカバカ言っなよ！！頑張ってるじゃねーか俺が！全身全霊

「!!」

「お前の頑張りは空回りしてんだよ!」

今にも顔がくっつきそうなくらい顔を近くにして言い争っている。

「巻君もどくろ君も仲良しだね!」

グリンツと咲楽に顔を向けて、

「どこをどう見たら仲良しに見えるんだよ!!!」

やべえハモった。

息ぴったりじゃん。

「チツ オラ、さっさと行くぞ。」

「わかってるつつーの!」

俺は反抗期の息子かよ!!

もう何としても合格して蓮を見返してやる!

俺が決意を決めた時だった。

とんつとんつとんつ

木の柱を軽い足取りで跳ぶように進むパーティーがいた。

「なんだありゃ、すごすぎるだろ。」

「すごいね。ねっ巻君!」

「そうだな。」

短髪の赤いマフラーをした男は、首元に狐の入れ墨あって、三つ編みの女は腕に蛇の入れ墨、黒髪のポニーテールの男か女かわからない奴は、背中に般若の入れ墨があった。

不良か？入れ墨とか・・・

まあ、すごいことに変わりはない。

「あ、思い出した。さっきの入れ墨があったパーティーのこと。」

「有名なのか？」

「ん、まあな。」

正直、なんとなくがあいつらは危険な感じがした。

「あいつらの中学校は、超エリート、天明中学校といってな、エスカレーター式のところだ。」

「へえーやっぱ雰囲気全然違ったよねー。なんか怖かった！」

咲楽ちゃんも感じてたのか。

なんか超エリートって感じ。嫌味な奴らだ。

まあ俺も成績は良かったからな。足元にも及ばないことはない。

「でだな、入れ墨があるやつらは特に成績がよかったやつなんだ。ほとんどの高校から推薦がきているはずだ。」

な、すげー！！！！！！！！！！

ってこの高校そんなにすごい高校だったんだ！！

この先、ちゃんと生きていけるか心配になった。

続く

入学試験と拷問3（後書き）

半端な終わり方ですみません…
読んで下さった方、ありがとうございます。

入学試験と拷問 4（前書き）

4 話目です。 よろしくお願ひします。

入学試験と拷問 4

はあ、疲れた。

なんだこれ、ただのアスレチック的なものじゃねえだろ！……
つてか、

「同じところをぐるぐる回ってる気がする。」

「そうかな？」

「俺もちょうど天神と同じことを考えていた。奇遇だな。」

なんだ、蓮もか。

「なんか印でもつけておくか？もしかしたら同じところをぐるぐる
回ってるかもしれないからな。」

「おっそれならわかりやすいしな！」

「でもそれじゃあほかの人にも気づかれちゃうよ？先に行かれちゃ
うよ？」

うーーーーん……………

「あつ！そこにさっきの天明のやつらがいるじゃん！！」

「あの人たちについていけば何とかなるんじゃないかな？」

「そうだな。たまにはできるじゃねえか。」

「たまにつてなんだよ。まだ少ししか関わってねえじゃねえかよっ
！！」

「……………」

シカトしやがったこいつ……………

とことんムカツク野郎だなこいつ……………

「お前、とことんムカツク野郎だなこいつ……。とか思っ
てないよな？」

「思ってたませーん!!」

やっぱりこいつ読心術使えるだろ!!

「よし、あいつらから目を離すなよ。」

「わかったー!! 巻君かつこいー!!」

おい、それ考えたの俺だし!!

俺も咲楽ちゃんにかっこいいって言われたいし!! ずりーぞ!!

「おい、天神、ぼーっとすんな」

はっ俺としたことが!

「あ、あの人たち、なんかあそこをずっとろちよろしてる!」

「? あそつこで、ただの行き止まりじゃん。」

ん? あれ? あいつら、何かを探してる?

天明の人たちは、一枚の板を押した。

すると、床の板が落ちて、下に行った。

「!?!? なんだありやあ!?!」

「ただの仕掛けだろ。そろそろほかのやつらも気づき始めているな。」

「じゃあさっさと行っちゃおう!! レッツ!」

どくろ達はさつき天明の人達がいたところに走っていった。

「たしか、ここら辺だったはず……」

ガコンッ

ふっふっふ……。

これで一步合格に近づいて……
……あれ？

ガコンッ

……あれ？

ガコンッ ガコンッ ガコガコガコガコッ

「なあ……何も起こらないぞ？」

「そうだな。」

「うん。そうだね。」

う……うそだろおおおおお！！

どくろは頭を抱えて取り乱した。

「まあ落ち着けて。これと同じような行き止まりはほかにあった
だろ？」

「そこを手当たり次第、さつきみたいに板を押していけば何とかな
るよっ！」

蓮、咲楽ちゃん……

「応っ！！ゴール目指して頑張ろうぜ！！」

どくろは珍しくキメ顔になった。

「ふん。お前が頑張ろうと頑張んなくても必ずゴールする。」

「うふふ。一緒にゴールしようねっ（ニコッ）」

蓮はとにかく、咲楽ちゃんのスマイル最高おおお！！

「うおおおおおおお！！！！なんかやる気出てきた！！！！つくぜええええ！！！」

「だああああああああ！！！！お前一人で先に進むなよ！さっきも言っただけはぐれたらどうするんだ！」

「うつせえなあ」

「お前のほうがうるさい！！！」

「お母さんかよ！」

「ちげえよ！！！」

なんだよこいつ！！俺にばかりつつかかってきてよ！

「二人とも本当に仲がいいねえ」

「どこがだよ！！！」

咲楽ちゃん！！おれ、こいつ苦手だ！！

なんでパーティーに入れたんだよ！！幼馴染だからって性格悪すぎだろ！！

ちよっとかっこいいからって調子に乗るなよ！

俺のほうがかっこよくて愛らしくて素直だもんねっ！

「お前、心の中で俺を馬鹿にした挙句、自画自賛しただろ。」

「？ 咲楽ちゃん、自画自賛って何？」

「自分で自分を褒めることだよ。」

へえーそうなんだ。っじゃなくて！！

「ちげーよ！いや、そうじゃないけど、ええええと・・・そ、
そうだよ！俺は自分のことを褒めました！褒めまくりました！なん
か文句あつか！！」

「そうか。そのことについては特に文句はない。だが、じゃあ俺を
馬鹿にしたことについては？」

「かなり馬鹿にしたぜ！性格が悪くて、ちょっとかつこいいからっ
て調子に乗ってるってな！！」

「はあ！？いつ俺が調子に乗ったんだよ！」

「さつきからずっとじゃボケエ！！」

「意味わかんねえよ！」

あああ！！もうしらねえ！！どうにでもなっちまえ！

「二人とも、喧嘩はやめようよ。」

咲楽ちゃんがなんと言おうと構うか！！

「もおいしい！！知るか！！俺一人で行く！！」

「どくる君、一回落ち着こうよ」

「落ち着けるか！全ては蓮のせいだ！！」

「はあ！？なんでだよ！！」

そうだ、全ては蓮のせいだ。俺がせつかくやる気を出しているのに・
・・・

「おい、お前希咲先生の話、ちゃんと聞いてたのか！？パーティー全員でっせ俺は先に行くからな！！」

そう言いつつ、どくろは足早にその場を去った。

「はぁ………。ったく、どんだけわがままなんだ。天神どくろってやつは……。」

続く

入学試験と拷問4（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

これからどくる君はどうなってしまっんでしょうね（笑）

入学試験と拷問5（前書き）

5話目です。

入学試験と拷問シリーズがやけに長いですね。
よろしく願います。

入学試験と拷問5

「ったく、蓮のやつ、ほんと腹立つなあ……」

もともとあいつが悪いんだ。もうどうなっても知らん。

「えっと……行き止まりを探せばいいんだっけ。」

どくろは、手当たり次第に行き止まりを探した。

「……どうしよう、ぜんぜん見つかんねえ……」

やばいやばいやばい。どうしよう。

……不覚。

こんなときに咲楽ちゃんと蓮の顔が思い浮かんでしまった……。

「これって完全に迷ったんじゃないか？え。噓。マジ！？どうしよう。」

「

なんで一人で飛び出してしまったんだろう。

ちゃんと咲楽ちゃん心配して……あれ？

そっいえば蓮もちゃんと忠告してくれたよな……はぐれたらどうするつもりだ！って……

「はは……はは……ははははは……。」

結局全部俺のわがままだったんじゃないかww

そう、やる気とかいろいろ言ってさ。

ふはははは。なんか笑えてくるぜ！

なんだっけ、そういえば遙先生がなんか言っていたはず……
はっっ！！！！

「ゴールは全員でたどり着かなきゃいけねえんじゃねえかよー！」

たしか蓮もそういうこと言ってた気がするー！

なんだよー！全部蓮が言ってたじゃんー！

……なんか悔しい。

今頃咲楽ちゃんと蓮は必死に俺のこと探しているだろうなあ。

「うっし！行くぜ！待ってるよ！咲楽ちゃんー！蓮っー！」

どくろがそう言った瞬間、

「その必要はないぞ。バカ。」

「ふふ。こんなところにいたんだ。探したよ？迷子のおバカさん。」

上から蓮と咲楽が降りてきた。

「え？蓮？咲楽ちゃん？」

「ったく、勢いよく飛び出したと思ったら、200メートル以内に
いるとは思わなかったぜ。」

「けっこう遠くまで探したんだよ？」

咲楽ちゃん、蓮……。

俺……俺……俺……幸せ者だあああああああ
！！

「うう、ごめん。わがままで、自分勝手に……」

「いや、俺こそきついことを言ってしまったな。」

「喧嘩両成敗だねっ！」

「ああ、そうだな。」

俺、このパーティーでよかったああああああああ！！

「うわっ！鼻水垂らすなバカっ！汚ねえ！！」

「おふえ、ファンぢえぎゆしちやぎやビィヴやびゅヴおおおおお
おおお！！！！」

「何言ってるわかんねーよ！！」

・

・

・

「ふいーーーー」

「やっと落ち着いたか。」

どくろはさっきまで涙と鼻水が止まらなかったのだ。

「ほら、さっさといくぞ。だんだん人が少なくなってきた。」

「あ、本当だあ。」

「すまん。涙と鼻水の2TOPが止まらなかったんだ。」

ちょうど目の前に行き止まりがあった。

「お、ちょうどいいじゃん。」

「よし、そこに乗れ。じゃ、押すぞー。」

ガコンッ

「!!!」

「うおっ!!」

「きゃっ!」

ものすごいスピードで落ちていく。
下にはあっという間についた。

「早かったな。」

「そうだね。」

「うん。」

なんか、さっきの楽しかったな。ガコンッっていう感じ。

「よし、行くぞ。天神、さっきみたいなこともうすんなよ。」

「わかってるっつーの!!」

しばらく歩いていくと、丸太一本があった。

「え?ここを歩くの?」

咲楽ちゃんの顔が青ざめている。

「大丈夫か?咲楽。」

「全然大丈夫じゃないよお……。こわいよお……。」

こんなこと思っるのは失礼かもしれないが、怖がってガクガクしている咲楽ちゃんはずごくかわいい。

「ふえ？」

蓮がひょいっと咲樂をお姫様抱っこした。

ず、ずるいぞ！！蓮つつつ！！！！

「はあ、ちゃんと飯食ってないだろ。肉食え。肉。」

「ちゃ、ちゃんと食べてるモン！」

なんだこの二人との関係は……。

は、入れる気がしない。二人の間に花が咲いてるぞ。

「れ、蓮。その状態で行くのか？」

「あたりまえだろ。」

「す、少し恥ずかしいけれど、巻君なら安心できるし、信用してるんだっ！」

NOおおおおおおおおお！！！！

破局

なんなんだ。あの二人の間にあるものは！！これがおさななじみというやつか！！

べ、べつにうらやましいとか思ってたねーしいー

そんなん１ミリも思ってたねーしいー

「？ 何変な顔してんだ。」

「べつべつにー。」

「ふーん。じゃ、行くぞ。」

うわ、意外と怖いぞこれ。

え！？なにスイスイ進んでんの！？蓮のやつ！！

「咲楽、下、絶対に見るなよ。見たらお前、必ずというほど暴れるからな。小さいころ、お前のせいで落ちたからな。」

「あ、あれはかなり怖かったんだもん！しょうがないじゃん！」

くそ、イチャイチャしやがって。

あ、もう少しで終わるな。余裕余裕！

「ふう、結構長かったな。この丸太。」

「どくろくー！ーん！あとちよつとだよお！がんばれー！」

おう！言われなくてもがんばってるＺＥ！！
あと１歩！！

「ああ、やつとおわっ！！！！！！！！！」

ズルツツ

「はうあつつ！！！！！！！」

「どくろくくん！？」

「ちっ！！」

パシイイっつ

間一髪のところでは蓮はどくろの手をつかんだ。

「…………大丈夫か？」

「う…………ん。何とか。」

咲楽ちゃんは目をきらきらさせている。

「何ガン見してんだよ。咲楽。」

「いやあ、なんかこういうのかっこいいなあって思ってた!!」

「ありがとうな。蓮。」

「ふん。当たり前なことをしたまでだ。」

「こっこれって正面から素直にありがとうって言われると照れるっていうやつ？巻君。」

「だっ誰が照れるか!!」

「照れんなってwww」

「だから照れてねえ!!!!」

それから坂を上ったり、一枚の板を渡ったり、ロククライミングみたいなもやった。

・

・

・

「このアスレチック的なもの、すごく手が込んでるよな。」

「そうだな。」

「つかれたあ」

お！？あれは!!まさかの!？

「ゴール……だな。」

「やったあああああああ!!」

「ほら、最後はみんなでゴール!だよな?」

「あたりまえだ。」

みんなでいっせいにゴールへ足を運び入れた。
ゴールに待ち構えていたらしい遙先生が、

「150組中64位・・・か。なかなかいい成績だな。ゴールやついたやつらは面接に行っている。そこにある紙を持っていけ。入り口から出てすぐの曲がり角をまっすぐ行け。一番奥の部屋が面接室だ。」

そう言って話を終わらせた。どうやら質問は受け付けないらしい。

続く

入学試験と拷問5（後書き）

多分けっこう長く書いた気がします。
読んでくださってありがとうございます。

面接と帰り道（前書き）

5話目です。よろしくお願いします。

面接と帰り道

面接はありきたりなものだった。

なぜこの高校に入ろうと思ったのかとか、この高校に入ったら何をしたいのかなどなど・・・

天神どくろはただ1つ気になる質問があった。

「君は、死ぬ覚悟がありますか？又はどんな困難にも立ち向かうことができますか？」

え？何その質問。

どくろはその質問にすぐ答えられなかった。

なんか非日常なことが起こるのか？この高校は。まあとりあえず・・・

「場合によつてはできると思います。」

面接官はこの答えに少し驚いたらしく、少し眼を見開いた。

え。なんか変な答え方したかな。ただでさえ怖い顔つきなのにさらに怖くなった気がする・・・

「（ボソツ）普通の人ならばすぐに死ぬ覚悟あります！とか、できますっ！って答えるのにな・・・。」

なんかつぶやきました？え。なになに。気になるんですけど。

・
・
「ふああああ！……緊張したあああ！……」

5メートルくらいうしろから、

「どくろく……ん。」

こっ！この声は……！

「咲楽ちゃん！……と……蓮……！」

何であいつもいるんだよっ！……いや、べつにいいけどさ。

「どうだった？緊張した？」

「まあね。ってかさ、面接官怖くなかった？」

「超怖かった！……目つきが悪かった！……」

やっぱり怖かったよね……！

「じゃ、私達家こっちだから。バイバー……イ」

ブンブンと手を振っていたので、どくろも手を振り返した。

やっぱりかわいいなあ……。咲楽ちゃん。

俺はこれから起こる数々の困難を知る由もなかった。

続く

面接と帰り道（後書き）

短いすね。

そうです。平均的に文字数が少ないんです。
読んでくださってありがとうございます。

合格発表といきなり明後日（前書き）

7話目です。

よろしく願います。

合格発表といきなり明後日

天神どくろは今、ドキドキすぎて死にそうです。

朝起きてからも、なんかパツとしないし、電柱に頭を12回ぶつけました。

そう。今日はついにこの日。

合格発表の日なのです。

「のあああああああ！！！！しまったあああああああ！！！！」

やばい。実にやばい。

・・・・・・迷ってしまった。

いや、ちゃんと理由はあるんだ。

その・・・・・・。いろいろと考え事をしていたら、電柱に頭をぶつけまくって、意識が朦朧として・・・・・・いやいやいやいや、待てって。別に言い訳なんかじゃ・・・・・・。

・・・・・・つかさつきから俺は誰に何を言っているんだ。うん。自分と日本語で会話をして・・・・・・はあ。これからどうしよう。

見たこともない景色に動揺を隠せない。まるで知らない世界に放り込まれたような、一歩も踏み出せないあの感覚。しばらくすると、後ろから聞いたことのある声が聴こえてきた。

「天神？何をやってるんだ？こんなところで。お前の家はあつちじゃな」「蓮んんんんんんんんんん！！！！！！！！」

よかったあああああああ！！！！俺は一人じゃないんだああ

あああああああああ！！！！！！！！！

「お前、まさか迷ったな？どうせぼーっとしてたらこんなところに来てしまったんだろ？はは、お前らしいな。」

お前に俺の何がわかる。全部当たっているけど。

「ったく、咲楽もあそこで悶々しているけどよ。」

「えっ！まじで！？咲楽ちゃん！？」

どくろは一気に復活した！

「ふえ？どくろ君？」

「久しぶり！！元気でやってたか？」

「うん。おかでさまで（ニコッ）」

久しぶりの咲楽ちゃんスマイルきたあああああああ！！！！！！
ヤベエ。テンションあがってきた！！！！！！

「ほら、さっさといくぞ。」

しばらく歩くと、あああ高校（仮）についた。

うっ。さらに緊張してきた。どうしよう！！

目の前を見ると、すごい人の数がひとつの場所に集まっていた。
どくろ達は、ものすごい人の数を掻き分けて、合格者発表が書かれてある紙を見た。

「えーーーーーと。番号は……………！！！！！！」

蓮と咲楽も自分の番号を見つけたようだ。
蓮が、

「とりあえず人のいないところに行こう。ちょうど近くに公園があるだろ。そこに行こう。」

「うん。」

「そうだね。」

・

・

・

「じゃあ、俺から言うぞ。俺は・・・・・・・・合格だった。」

「おお！！さすがだね！！」

「おめでとう！！」

「次は咲楽。」

咲楽ちゃんは・・・・？

「私も合格だったよ！！」

「よかったな！！じゃ、次は天神。」

「俺は・・・・・・。」

全員が息を呑んだ。

「合格だ。」

まさかどくろが合格するとは思ってなかったのか、蓮と咲楽は驚きすぎて声も出せない。

「おいおいおいおい。ちょっと！何かしゃべろーぜ！！しらけるなよ！！」

「いや、まさかお前が合格するとは思わなかったんだ。」

「ちよっ！失礼なっつー！！」

「実は私も……………」

「咲楽ちゃんも！？」

そんなにも俺がバカに見えたのか？失礼すぎだぞ。二人とも。

「合格者が持つていけるパンフレットはもってきたな？」

「うん！！」

「もちろん！！」

全員、パンフレットのページ目を開いた。

「合格者のみなさまへ」

合格おめでとうございます。

あなたは本校の生徒確定です。入学試験の内容は、誰にも話さないでください。話した方は、それ相応の罰を受けていただきます。

本校は、完全なる全寮制です。家には許可をとらないといけません。さて、説明はここぐらいにして、これから大事な話になります。

入学式は、明後日とさせていただきます。今日と明日で荷物を全部まとめてきてください。忘れ物をして、取りには行けません。制服などは、こちらで配ります。

9：30 登校時間

10：00 入学式

保護者は同席できません。

* 持ってきてはいけないもの*

- ・盗聴器
 - ・盗撮器
 - ・携帯電話
 - ・刃物
 - ・銃
 - ・パソコン
 - ・ゲーム機
 - ・音楽プレーヤー
 - ・録音器具
- 校門で持ち物検査をします。

「なんだこりゃ。」

「どっかの組織に狙われてるのか？」

「なんだか恐ろしいねえ」

ってかなんなんだ。入学式が明後日なんて。早すぎだろ。

それも設定が恐ろしすぎるだろ。この高校。いや、高校じゃねえな。多分。

常識じゃありえないし。

なんだか非日常なことが起こりそうな予感がしてきたぞ。

続く

合格発表といきなり明後日（後書き）

やっとキャラが定まってきた感じがします。
読んでくださってありがとうございます。

入学式と校長先生のお話（前書き）

8話目です。

よろしく願います。

入学式と校長先生のお話

今日は入学式。

持ち物チェックは100回以上したと思う！忘れ物をしたら大変なことになるからな！！

「よしっ！行くか！！」

家には一人。母ちゃんは離婚して今はバツ1。

パートで頑張って働いてくれている。

「………こんなにア充な話は置いといて、今日も誰もいない家に行つて来ますを告げる。」

かなり重い荷物を持ってドアを開ける。

・

・

・

「よっ！咲楽ちゃん！蓮っ！！」

「あ、どろくん、やつほー。」

「ん。ああ。」

しばらく歩くと、長い行列ができていた。

「持ち物検査か。かなり長いな。」

「大丈夫かなあ。私。」

「大丈夫だよ。」

10分後

「まだか？」

「まだだね。」

それから30分後

「まだなのか？」

「遅いね。」

「長すぎじゃね？」

それから5分後

「やつとか。」

「すごく待ったねー」

「半分寝てたぜ。」

持ち物検査は、かばんやリュックの中身はもちろん、ポケットの中や衣服のいたるところを調べられ、金属検査もさせられた。

すごく警戒してるな。怖い怖い。

たしか合格者数は450人中100人だけだったな。

俺が入れたことは奇跡なんじゃないかっていまさら思う。

ま、いまさらそんなこと考えたって何にも変わりやあしない。そうこうしているうちに持ち物検査は終わっていた。

おかげさまで誰も引つかかっていない。

・

・
・

廊下にはクラス分けの紙が貼り出されていた。

「あつ！俺と咲楽ちゃんと蓮、同じクラスだ！！」

「何組だ？」

「1 - B だつてさ！よかったね！」

「早速行こうぜ！」

「あんまり浮かれるな。恥ずかしい。」

一年生の教室は廊下を右に曲がつてすぐあつた。

「あつた！1 - B。」

「お、寮のメンバーが黒板に貼られているぞ。」

すぐに黒板に駆け寄つた。

「え〜と…………。どれどれ？」

0008号室

黒斬ハク<クロギリ ハク>

天神どくろ

巻蓮

細燦渚<サイサン ナギサ>

0322号室

鑑紋ライト<カンブン ライト>

春色咲楽

短髪の赤マフラー！

かけー。マジかけー。生徒代表とか。

「校長先生の話。赤白躑躅くアカシロ ツツジく校長先生お願いします。」

やべえ。校長先生。超美人じゃん。

「えー。あーあーあー。生徒の皆さん、はじめまして。赤白躑躅です。皆さんは、選ばれた生徒です。この高校の名前こそがステータス！なのです。この高校の勉強は、あんまり世間一般的な勉強はしませんが、資格はたんまり取れます！そう、この高校は特殊だから！皆さんには、この高校で生活する以上、探し物を捜すという、大事な仕事をしていただきます。詳しいことは、まあ、担任の先生に聞いてください。命にかかわる仕事もあるかもしれません。それでは終わらせていただきます。」

校長先生は美しい礼をして、盛大な拍手とともにステージから下りた。

ていうか探し物を探すのに命にこともあるかもしれないってどういうことだよっ！！

続く

入学式と校長先生のお話（後書き）

やっと題名と絡んできました。

読んでくださってありがとうございます。

高校生活と寮生活のこれから（前書き）

9 話目です。

よろしくおねがいます。

高校生活と寮生活のこれから

自分の席は好きなのところに座っていいそうで、一番後ろの席に、左が蓮、真ん中が咲楽、右がどくろという席になった。

「担任の希咲遥だ。よろしくな。」

やった！遥先生じゃん！ラッキー！

さっそく教科書などが配られた。かばんは机の横にかけられていた。

「ナニコレッ！超薄いじゃん！」

小学校の教科書より薄いよ、この教科書。

「この教科書は必要最低限に覚えることしか入っていない。たとえば、数学の教科書は計算の方程式や図形や記号のことしか書かれていない。多分。しかし、英語や科学の教科書は分厚いぞ。科学は、薬品とか爆弾などの取り扱いについてとかはしつこく書かれている。覚えるのは大変だが、貴様らは選ばれた人間だからな。」

うえゝ英語とか無理。嫌い。

「あ、校長先生の話であつたが、「探し物」という仕事について、だ。」

そういうと、どこからから取り出した、大きな紙を、黒板に貼り付けた。

「このような、S / A / B / C / Dランクの仕事に大きく分かれる。この後組んでもらうが、三人一組のパーティーで、この仕事をこなしてもらおう。これは仕事だからな、ちゃんとあとで報酬は出るぞ。探し物の仕事を簡単にこなすには、いろいろと資格が必要だ。無線機とか、危険物取り扱いとか。ちゃんと取っていたほうがあとで楽だぞ。」

これって強制的ですか？

「ま、貴様らは初心者だからな。最初はDランクから始めるんだな。資格はいろんなのが取れるからな。最初にとっておいたほうがおすすめだ。S / Aランクになるとまあ、人殺しができるかもしれんが、あんまり仕事で人を殺すなよ。死体処理とかあとで大変なんだからな。」

ひっ！人殺しだあ！？じゃあこっちからも死んだ人とか出てくるんじゃないのか！？ええ！？マジナンナノ！？聞いてねえよ！！ええー！？帰ってえよ！本気で！！

「次は寮についてだが、基本4人で一部屋だ。これはかつてにくじ引きで決めさせてもらった。あくまで文句なしだぞ。なんていったってくじ引きだからな。」

ええー！。くじ引きであんな怖そうな人達と一緒にいるんですかあ！？あるいみ奇跡だよね！？

「ここには食堂もあるし、いろいろ設備が整ってるし、なんとたつて、そこの高校より断然広い。あ、大事なこと話すの忘れてた。朝、9：00までに教室に着席している。食堂が開いているのは、朝は6：00～8：30、昼は11：45～1：00、夜は7：00～

9：00だ。購買はいつでもあいている。消灯時間は12：00だ。いつまでも起きているなよ。朝の訓練はよほどのことがない限り毎朝5：30からだからな。このときは先輩も混ざっている。ふふ、先輩は恐ろしいぞ。殺気立っている。食堂は先輩達が去ってからいったほうがいいぞ。怪我したくなきゃな。」

はいっ！！俺は怪我したくありません！！！痛いのは嫌いです！！
 ってか、先輩どんだけ恐ろしいんですか！？先輩の権力か！？

「まあ、ついでに教えておこう1年生は黄色のネクタイで、100人だ。2年生は白のネクタイで89人だ。3年生は赤のネクタイで74人だ。2年生や3年生は1年生のころ、ちゃんと100人だったんだ。と、いうことは・・・・・・？足りない人数はどこに行ってしまったんだろうな（ニヤリ）」

こわあああああああー！！ええええええええええ
えええ！その笑い方も含めてこえーよ！！
ちよっ！！この高校やばいつて！！こわいつて！！帰りたい！！

「おい。お前、なんちゅー顔してやがる。」

7
 •
 •
 •
 •
 •
 •
 ○
 8

「だめだ。ぜんぜん聞こえてねえ。」

あとから聞いたけど、パソコンとケータイとマイクとイヤホンと時

計と無線機とあと……なんだっけ。まあ、いろいろなものが渡されたらしい。

……ってかその前に俺は今、危険な状態になっている。そう、今は寮の中。そしてベットは二段ベット。どちらが上になるのか話し合っているところだ。

しばらくの沈黙。

おい。誰か何かしゃべれよ。全然進まねえじゃねえかよ。

「これは、公平にじゃんけんでいいよな。」

よくやった！！蓮！！

「あ、その前におれ、右側のベットがいい。」

「じゃ、じゃあ俺も右側！！」

「じゃ、私と渚は左側でいいよな。」

「同意する。」

いよっしやああああああ！！

「じゃあ俺は蓮とじゃんけんすればいいんだよな。」

「そういうことだ。」

「じゃんけんっあっちよと待って。今、念を込めるから。」

「ちっ早くしろよ。」

こっいうのは気合だ！！

「「じゃんけんっポン！！」」

「……勝った！！」

「ちっ俺が下かよ」

ちなみにあちらのほうはハクが下で、渚が上だった。

このあと、ご飯を食べて、無事に就寝することができた。

続く

高校生活と寮生活のこれから（後書き）

知らない人達と生活するって緊張しますよね。多分。
読んでくださりありがとうございました。

授業と初めて気づいたこと(前書き)

10話目です。

よろしく願います。

授業と初めて気づいたこと

昨日、自販機に蓮と一緒に行った時のことだ。

「なあ。この高校ってなんか、すげー変わってるよな。」

「なんていったってスパイや殺し屋をつくる育成所みたいなところだからな。」

「え！？そ、そうだったのか？全然知らなかった！！初耳！！」

「はあ！？お前、そんなことも知らないでこの高校に入学したのか？お前以外のやつは全員知ってるぞ！」

「マジで！？」

マジかよ。全然知らなかった。なんせ都市伝説しか見てなかったからな（キリッ）

・

・

・

ジリリリリリリリリリ！！！！！！

「ん？ふああああ。朝か。」

どくろは目覚まし時計のスイッチを押した。

「おい。蓮。起きたか？」

「・・・・・・・・・・。」

どくろは蓮のほうに行った。

「おい。起きろって。」

「うるさい。」

イラッ。こいつ、朝弱いほうだな。

どくろは蓮の布団を剥いだ。

「っ！！何をする！！返せ！！」

ドタン バタン

「ふー。やっと起きたか。」

「ちっ。目覚めから最悪だ。」

イラッ！せっかく起こしてやったのに！

「さっさとジャージに着替えて朝の訓練行こう。わかった？蓮」
「・・・・・・・・・・。」

シカトかよ。

やっと蓮は準備が整って外に出た。

「ほらっ！みんなもう集合してる！」

「そうだな。」

こいつ・・・・・・・・・・。低血圧で朝、機嫌が悪いめんどくせえやつだ

な。

朝の訓練は、校庭を10周して、体操をするだけだった。

「意外と楽しかったな。」

「だな。」

どんっ

「うわ。すみません。」

やべえ。先輩じゃん！

「いや、本当にすみませんデシタ！」

その先輩は笑顔で、

「そんなに怖がらないでください。余所見をしていた俺も悪いんですから。」

眼鏡をかけた先輩はそう言った。そして友達と思われる人のほうへ走っていった。

「よかったな。優しい先輩で。」

「おう。死ぬかと思った。」

ドスッ

後ろから背中を押された。

「おはよう！巻君、どくろくん。」

咲楽ちゃん！！朝から咲楽ちゃんを見られた！！イヤッホーイ！

「よう。同じ部屋のやつはどうだ？」

「すつごく優しい人たちだよ！」

このあと、食堂で超豪華な朝食を食べた。

「授業だあああ。」

「だな。」

「たしか一時間目って科学だよな。」

教室のドアが開いて、科学の先生が入ってきた。

超ヒョロくて鉛筆みたいな奴かと思ったけど、超こっついじゃん。

「授業を始める。まず、ノートと教科書の2ページを開け。」

ペラリ

な、なんじゃこりゃ！文字だらけ！！それと少しの図。

「えー。今日の授業は爆弾についてだ。」

いきなり恐ろしいの勉強するんだな。

「昔は、凝った時限爆弾や解体しにくい爆弾が流行っていたが、今は、携帯電話で遠隔操作できるような簡単な爆弾だ。昔の技術も必要だが……………」

こんなのわかるかああああ！！！！
きっと蓮や咲楽ちゃんもわかんないだろ！！

どくろはちらつと右を見た。

な、なんだと！？一生懸命メモってるだ！？
うん。きっと大事な事なんだろうな。俺はスパイにも殺し屋にもなる気はないけど。

・

・

・

キンコーンカーンコーン

「これで授業を終わる。話したことは全部、重要なことだからな。」
やっと終わったー

「ふう。楽しかった！ね、どくろ君。」

え！？あの授業楽しかったか？

「あとで、どのくらいの火薬で人が一人死ぬのか質問しよう。」
怖いよ。咲楽ちゃん。目がぎらぎらしてる。

・
・
・

「やっと全部終わったー!!!」

「おい、食堂行くぞ。多分、先輩達は食べ終わったところだ。」

「そういえば朝からハク達を見てないよな。」

「俺はさっきトイレを見た。」

廊下を出て、一番奥の右の角を曲がると食堂だ。

「なんだ？やけにざわざわしているな。」

「なんか問題でもあったのかな。」

食堂を見ると、人が白目を向いて倒れていた。

その、倒れていた人の前にハクがいた。

「ハク！？何をやって・・・何調子こいてんだ！この一年!!!」

渚に向かって3年生が右手を振り上げた。

渚は右によけて、両手を固めて、相手の頭に振り落とした。

「ぐあっ!!」

そのまま気絶してしまった。

渚はそのまま続けようとしたが、

「その辺にしとけ、気絶した人の見分けもつかないほどバカではな

いだろ。」

ハクが止めた。

食堂には、ハク達が怖いのか、人がいなくなっていた。

「どくろ君たちは行かなくていいのか？俺達は人を気絶させたこの中で一番危険な人間なんだぞ。」

ほら、もう帰ろうぜ。な、蓮。

と、どくろが目で訴えかけた。

「別に。黒斬達は喧嘩をふっかけられたから自己防衛をしただけだろ。」

「そのとおりだが………」

どくろはたまたまこんだて表が目に入った。

おっ。晩飯カツカレーじゃん。

「蓮。今日カツカレーだぞ。」

「食べる。」

ハク達は、少し驚いた顔をして、こう言った。

「隣で、食ってもいいか？」

「もちろんOK!!!」

そうだよな。同じ部屋にいる奴に何ビビッてんだ。でも、やっぱり喧嘩はよくないぞ。怖いから。

続
く

授業と初めて気づいたこと（後書き）

今回は少し戦闘シーンが入りましたね。爆弾に関しては、ガンスリ
ンガーガールを書き写しました。

表現力ないので、わからないと思います（笑）

読んでくださりありがとうございました。

鑑紋ライトと春色咲楽の生活（前書き）

11話目です。

よろしく願います。

ライトちゃんサイドで書きます。

鑑紋ライトと春色咲楽の生活

同じ部屋になった、春色咲楽って子……。

腹立つ。

あたしの嫌いなタイプだわ。

なんかあ、フワフワしてるしい、のろまだしい、見てるだけでイライラするんですけどお。

「はあ。疲れる。」

「そうだねっ！」

別に独り言だからあ、返事なくていいんですけどお。

ああもう！！イライラする！！

ライトは早く荷物を片付けて、ベットに転がった。

「あ。あたし、ベットここにやるからあ。」

誰も返事しない。

ふん。そんなのもうとくに慣れてるわ。

前の学校もそんなもんだったから。

ほかの女子なんて、キャーキャーわめくだけのおしゃべり人形。だから成績も上がらないのよ。天明の名にふさわしくないわ。

「じゃあ私、ライトちゃんの下で！」

「はあ！？」

あ、ありえない！！今まであたしなんかにかまってくる奴なんかいなかったのに！！

それに、気安くライトちゃんとか呼んでるわけえ！？
普通、鑑紋さんとかライトさんでしょ！？
あ、そうか。こいつ、普通じゃないのか。

「あ、ごめん。ダメだったかな？」

「べ、別に。そこがいいんだっただらそこでいいんじゃない？」
「うん！私、ここがいい！！」

変わった奴。

よかったわね。女子A、女子B。あたしの下じゃなくて。
ほら、何だか嬉しそうね。

さっきまでヒソヒソと「やだあ。」とか、「なんであいつと同じ部屋なの。」とかぐだめいてたくせに。

そりゃあ、あたしだって嫌われていることぐらいわかってる。

でも、誰かと関わると、よけい傷ついてしまう。

あんなこと……。もう……。もう……。

「ライトちゃん！一緒に食堂でご飯食べよう？」

いやよ。

あたしはハクさんや渚さんと一緒に食べたいの。

あ。でも今日、用事があるとか言ってたわね。

そうね。今日だけ。

「いいわよ。」

「やったあ！」

なんであたしと食事をするだけでそんなに嬉しそうにするのよ。
うざいわ。

あたしを知ろうとしないで。

・

・

・

「今日の晩御飯はバイキングだって!!」

「そう。」

「ケーキもいっぱいあるよ!!」

「よかったわね。」

「ライトちゃんはケーキ好き？」

「甘いものは何でも好きよ。」

ああ！うるさいわね!!

よこからペチャクチャペチャクチャ！

「嫌いな食べ物とかある？」

「漬物と生臭いもの。」

「お寿司とか食べれる？」

「無理よ。」

あたしの好き嫌いとかどうでもいいじゃない!!

でも……………。

ケーキ……………食べたい。

チョコレートケーキ、ショートケーキ、タルト、モンブラン、シヨ
クラ、フルーツケーキと、アップルパイもあるのね。

「早く行かなくちゃ。」

「ライトちゃん？」

ライトはケーキのある方へ早足で向かった。
おぼん2個にピラミッド状に、各種類のケーキを乗せている。合計
56個。

そして、おぼん4個にチョコレートケーキとショートケーキとタル
トとショコラを1ホールずつ乗せた。

「うわぁ……すごい量だね。」

「ケーキが好きなの。」

咲楽のおぼんの上には味噌汁とわかめご飯、漬物と玉子焼きと天ぷ
らという、和食でバランスのよいものだ。

「先に食べてもいいわよ。別にどうしてもあなたと食べたいって
わけじゃないし。」

「ううん。ライトちゃんが来るまで待つてるよ。」

本当にどうでもいいのに。

あたしのことなんてほっっておいて食べちゃいなさいよ。

ライトはアールグレイの紅茶に砂糖をおおさじ3杯入れた。
咲楽はちゃんと食べずにライトのことを待っていた。

「なんだ。まだ食べてなかったんだあ。もうとっくに食べてると
思ったのにい。」

「ちゃんとライトちゃんが来るまで待つてたよ！ふふっ。」

ちっ。なんなのよ。こいつ。

「さっ。食べいただきます。」

ライトはショートケーキにフォークを刺した。

「ライト？」

この声は・・・・・・・・！！

「ハクさん？」

ハクさんだわ！！渚さんもいるわ！！

「ハクさん、今日は用事があるって言うてませんでしたっけ？」

「もう終わりましたよ。渚がやけに手際がよくてね。」

「腹が減ったからな。」

ああ、ハクさんも渚さんも今日も相変わらずお綺麗ですわ！！

「じゃあ、私達はあちらで食事をしてきます。ライトはお友達と食事をしているようですから。」

「とっ！友達じゃありませんっ！！」

そう。こんなやつ、友達じゃないわっ！！

「そうですか。それでは。」

ハク達は去っていった。

「ねえ。ライトちゃん。」

「何よ。」

さっきの、友達じゃないって言ったこと、怒ってるのかしら。
でも、あなたのせいでハクさん達とお食事できませんでしたのよ。

「なんで敬語を使ってるの？」

「……はあ？」

「敬語を使ってるのがダメなのかしら？」

「いや、同じ学校だし、そんなに親しいのになんで敬語を使っているんだろうなーって思ってる。」

そんなこと、どうでもいいじゃない。

「知らないわよ。親しき仲にも礼儀ありってことじゃない？」

「そっかー。」

嘘よ。タイミングがわからなかったのよ。
痛いことを質問しないでくれないかしら。

ライトは、咲楽に話しかけられても無視し続けて食事をした。
見事にケーキを食べ終えて、ライトはハク達の所に行った、

「ハクさん、渚さん。」

「ライト。何のようですか？」

「ハクさん、バレてませんか？」

「うん。大丈夫ですよ。」

よかった。もしバレたら大変なことになるから。

「マフラーは欠かさずしててくださいね。寝ているときも。」

「わかっていますよ。」

「渚さん。ハクさんを守ってくださいね。ハクさんに誰も近寄せないでください。もしものがあってからでは遅いのですから。」

「承知した。」

「本当に心配性ですよね。ライトは。」

「あたしはハクさんが大好きなのですから。恋愛感情じゃないですけど。」

そう。あたしはこれ以上失うわけにはいかないから。

続く

鑑紋ライトと春色咲楽の生活（後書き）

いろいろと疑問があると思います。

ハクの秘密について、ライトの過去についてなどなど。

まあ、それはのちのち書きます。

読んでくださりありがとうございました。

あのときの食事と意外なアレ（前書き）

12話目です。

よろしく願います。

あのときの食事と意外なアレ

「隣で、食ってもいいか？」

え、全然かまわないけど。

つてか隣で食べるつもりだったんだけどね。俺。

「OK!!!」

ハクはほつとした表情をした。

「ほら、早くしろ。カツカレーが冷めてしまう。」

「どんだけ楽しみなんだよカツカレーが。」

「カツカレーは好きな食べ物ベスト10に入っている。」

ま、カツカレーはかなりおいしいけどな。

「渚も好きだよな。カツカレー。」

「好きだ。」

なんで渚って口が少ないんだろう。

しゃべるの、苦手なのかな。

「いいにおいー！ヤバイ。早く食べようぜーっておい、まだ待てよ
蓮！今にも食いそうだぞ！」

「…………早く食べたい。早く早く早く早く。」

「待てって。あと少しだから。」

「よし。こちら準備はできたぞ。」

「じゃ、せーので行くぞー。せーのっ」

「「「ただk」「全ての動植物と・・・・・・・・」

なんだこの差は・・・・・・・・!!

さすが天明出身。お坊ちゃんって感じがするぜ。

ブハッ！蓮が戸惑ってる！

ってか食事の挨拶が全ての動植物と・・・・・・・・で始まるとか漫画でしか見たことねーから！！

「「「いただきます。」「」「」

熱々のカツカレーを口に入れる。

「アツツ！！うまつ！！」

「うん。うまいな。」

「あつつ・・・・・・・・。」

「渚は猫舌だもんな。ふふつ。その顔久しぶりに見た。」

渚、全然熱そうに見えないし

見たか？俺のリアクション。渚から見たらありえないだろ。

「だからあ、昨日のはたまたまよ！予定が合わなかったからしょうがなくあなたと食事をしただけ！それ以上の何物もないわ！わかる？さつきから同じこと言ってるじゃない！」

「いや、今日も一緒に食べようよあ。」

「あら？話し声が聞こえないわ。人がいないのかしら？」

「あつ！巻君！どくる君！」

おっ！咲楽ちゃんと・・・・・・・・誰？

「はじめまして。あたしは、鑑紋ライトよ。あなた達はハクさんと

渚さんと同じ部屋に住んでいる……え、と。」

「巻蓮君と天神どくろ君ですよ。」

「そう！そのような名前でしたわ！」

いや、その名前ですけど。

ってかこいつさ、性格悪そう。さっきもなんか咲楽ちゃんに対して態度悪かったし、ハク達を見た瞬間性格がコロッと変わりやがった。嫌な奴。これが男好きって奴か。

「ところであなた。」

「え、俺？」

え、なになに。怖い顔で睨むなって。

「あたしはハクさんの隣で食事がしたいと思ってるんだけど。」

………で？

俺にどけるっていうことか？

「ライト。食事をしている人にどけるとは失礼ですよ。」

「でもっ！………わかりました。あなた。先ほどは失礼なことを言ってしまったて、申し訳ないと思ってるわ。」

「は、はあ。」

そんな棒読みで、しかも無表情で言い、心もこもってない侘びを言われても困るんですけど。

それも名前も呼んでくれないっていう（笑）

「それではあたしは、ハクさんの目の前で食事します。」

「じゃ、私はライトちゃんの隣で！」

おい。そんな嫌そうな顔するなよ。
咲楽ちゃんがよくても俺はよくない。

「あ、私、部屋に財布忘れてきちゃった。売店で買いたいのあったんだよね。取りにいつてくるね。」

咲楽は財布を取りに走って部屋に戻った。

「なあ。鑑紋ライトっていう奴やお。咲楽に対してちょっとばかり、いや、ちよつとでないな。すごく態度が悪くねえか？」
「なんですの？」

蓮！？

「さっきから咲楽に対する態度が悪いつつてんだよ。」

直球で言ったな。俺、どうなつてもしらねえから。

「あたしからも言わせてもらうけど、正直、あたしもあの子に迷惑しているわ。」

「はあ？咲楽はお前に迷惑かけてねえだろ。」

「あたしは迷惑なのよ！あたしに関わってくるし、しつこく付きまとってくるの！それがあたしは嫌なの！嫌って言っても何度も繰り返し返すの！うつつうしいの！！」

「ライト、そこまでにしませんか？」

「黒斬、お前は入ってくるな。」

「入ってくるなんて言われても、ライトは私の親しい人だからそれは無理だ。」

え。これヤバイことになってません？
喧嘩のフラグ立ってません？怖い怖い怖い。

「咲楽は中学生のとき、友達がいなかった！いつとも一人だけど、ニコニコしてたぜ！それが、初めて友達作ろうと思って話かけた奴がこんな態度が悪いやつだったら咲楽がよくても俺はイライラしてたまらない！」

「そんなの、あたしには関係ないわ！」

咲楽ちゃん、そんなつらい過去があつたんだね。

おさななじみの蓮しか頼る奴がいなかったんだな。

「私さあ、そっちの都合のいいように言いくるめられることが大嫌いなんだよな。こっちの事情も聞こうとしない。そうだろう？自分のほうがかわいそうだ。不幸な人なんだって、悲劇のヒロイン気取られても困るぜ。」

あれ？ハク、なんか雰囲気変わったか？

オーラが入学試験みたいだぞ。

「お前らは天明のトップだろ。別に嫌なこともないだろ。全てが充実してんだろ？」

「充実なんかこれっぽっちもしてねえよ。」

え？本当に？リア充してないの？マジで？

「ライトはな、お母さんがお父さんを殺害、預けられた家でも家庭内暴力、学校ではいじめを受けていたんだ。最悪だろ？そっちとは比べ物にならないくらい。」

沈黙。

そして、喧嘩の原因となった人物が現れた。

「あれ？みんな、まだ食べ終わってなかったの？財布捜してて結構遅くなったのに。」

「……咲楽ちゃん、今回の喧嘩の原因はあなたのおかげですよ。」

俺なんかビビッちまって全然しゃべってない。
空気読んでください。オネガイシマス。

「咲楽、売店でなんか買え、飯は別なところで食べ。」

咲楽は雰囲気をなんとなく察したのか、

「うん。わかった。メロンパン買う。」

何でメロンパンを買うことを宣言したのか意味不明なんですけど。
メロンパンっておいしいよね。どちらかというとチョコチップメロンパンが好き。

「殴り合いの喧嘩でもするか？」

「お互い、どちらも譲らぬようならば構わないが。」

ええ。殴り合いの喧嘩って……やっぱりこうなる感じ？

どくろは一応１メートルその場から離れた。

どちらも同じタイミングでその場から動いた。

蓮は、足を引っ掛けようとしたが、ハクはジャンプしてかわし、かかとおとしをした。

だが、足を掴まれ、下段回し蹴りをされた。

これ、全然殴り合いの喧嘩じゃねえじゃん！！
ただの漫画に出てくるような戦闘シーンだよね！？

仰向けになったハクの上に、蓮が乗っかり、マウントパンチを繰り返した。

マウントパンチとは、仰向けになった相手の上に乗り、その状態から繰り返し出すパンチのこと。

だが、ハクはそのパンチを寸のところで避け、蓮の腕を掴んで後ろに投げた。

うわ！なんちゅー腕力！！常人じゃねえ！！

蓮はすぐに立ち上がったが、肘打ちからの左フック、そしてボディフックを蓮の腹部に当てた。

「グッ！！」

蓮は、倒れこみそうな痛みをこらえて、体制を整えて相手の動きを見た。

ハクは中段を蹴り、素早く上段を蹴る、二段蹴りをしたが、すべて避けられてしまった。

「はあっ！！」

蓮は首投げをしようとしたが、ハクの上段回し蹴りによって防がれてしまった。

「くっそお!!」

その一瞬の隙を、ハクは見逃さなかった。
蓮にタツクルをして、足で首を締め上げ、三角締めをされた。

「ぐっ!!がぁ!!」

「痛いよな。痛いに決まってる。閉め技だからな。」

そのまま蓮は気絶してしまった。

「喧嘩を売った割には案外そうでもなかったな。」

どくろは蓮に駆け寄った。

「おい!!大丈夫か!？」

「無駄だぞ。気絶してるからな。」

くそ!!俺はビビッて動くこともできなかった!!

「さすがですわ!!すごく強いですわ!!完璧ですわ!!」

「じゃ、私は帰る。行くぞ。ライト。……。はぁ。渚、お前、この状態でカツカレーを5杯も食べていたのか？」

渚の横には食べ終わった皿が5つ重なっていた。

「かなりおいしかった。」

どくろが見たのは、蓮が咲楽に対する、ハクがライトに対する、それぞれの愛だった。

続く

あのときの食事と意外なアレ（後書き）

戦闘シーンを書くときが一番楽しかったです。

まだまだ謎が多いですが、がんばって書いていきたいと思っています。
読んで下さり、ありがとうございました。

戦闘中の蓮と決意（前書き）

13話目です。

蓮サイドで書いていきます。

よろしくお願いします。

戦闘中の蓮と決意

咲楽だつてつらい思いは経験してんだ。

俺は全てを知っている。

ずっと咲楽を見てきてから。

咲楽・・・俺は・・・

蓮は1発殴ろうと動き出した。

しかし、相手も動き出したので、体勢を崩そうと足をかけた。
ジャンプでかわされ、かかとおとしをされた。

肩にぶつかる前に足を掴んだ。

くっ！重い！

足を掴まれたら動けないだろ。

隙があるのは・・・足！！

左足を蹴り、ハクに馬乗りになった。

くらえ！何発も殴ってやるよ！！

しかし、かわされ、床に拳が激突した。

ちっ！かなり反射神経がいいなこいつ！

左手でまた殴ろうとしたが、腕を掴まれ、後ろに投げられた。

動けない！！くそ！！何だこいつの腕力は！！

だが、ダメージはない。こんなの、すぐに起き上がって反撃すれば・
・・・！！

起き上がった瞬間、顔に激しい痛みが襲った。

やっと殴られたことに気づいたとき、腹部に重い何かが激突した。

な．．．．．。重いっ。

鉄球か何かか？いや、素手だよな。

こらえろ、耐えるんだ！！

くそ、余裕な顔しやがって。

腹立つんだよおっ！！

蓮は脅威の集中力を発揮した。

素早い足の動きを避け、反撃しようとした。

俺は！弱くない！なのに．．．．．何で避けられてしまう！

動きについていけない。クソっ！！クソ！！！！！！

情が動きに出てしまっていたのか、隙ができてしまった。

腹部に突撃され、押し倒されてしまった。

三角締めを、無駄な動きをせずにかけられてしまった。

耳元に、囁くように透き通った声がした。

「蓮君、私はすごくガッカリした。情に流されてこんなに動きが鈍るなんてな。戦いに集中しなきゃ。負けてるからって熱くなるなよ。あくまでポーカーフェイス。私も少し熱くなってしまったけどな。ふふっ。」

女のような声だった。

そして、蓮はそのまま気絶してしまった。

少し意識があるとき、蓮はこう決意した。

俺は・・・絶対に・・・強くなつて・・・みせ
る！！

続く

戦闘中の蓮と決意（後書き）

圧倒的な強さですね、ハク。

マジかつこいいます。憧れちゃいます。

読んで下さり、ありがとうございます。

どくろの暴走と喧嘩の幕明け（前書き）

14 話目です。

よろしく願います。

どくろの暴走と喧嘩の幕明け

あの食事の後、どくろは蓮を部屋に連れて行った。

「くそ。なんで気を失った奴はこんなに重てえんだよ。」

蓮は今、どくろにおんぶされている状態だ。

メロンパンを食べ終わったのか、食堂に咲楽ちゃんが来た。

「どくろ君？何やってるの？」

見てのとおり、蓮をおんぶしているのさ。

「巻君、何でそんなにボロボロなの？怪我してるよね？何かあったよね？」

「いや……その……その……」

「答えてよ！！何があったの！！？」

怖いです。今までになく怖いです。

「ちょっと、その……喧嘩っていうか……」

喧嘩の原因になったの、咲楽ちゃんなんですけど！？何で俺が怒鳴られなきゃいけないの！？

「さつさと部屋に運んで！！なにチンタラしてんの！？」

「すみません……」

え。なんかこれおかしくねえか？

今頃、ハク達何やってるかな。部屋にも帰ってきてないようだし・
・・・。
やっぱ、顔合わせずらいよな。同じ部屋の人殴っちゃったからな。
きまづい雰囲気になるからなかなか帰って来れないよな。

「痛いよな。顔、腫れてるぞ。せつかくのナイスガイが台無しだ。」
「?何言って・・・・・。」

やっぱ、蓮は友達だから・・・・・え?いつ友達になったのだった?
そんなもん、俺が勝手に決めた!!じゃあもう一回。
やっぱ、蓮は友達だから、俺も同じ痛さを味あわないとな!!

「ちよつと、ふらつとどつかいてくるから、蓮のこと、よろしく
頼んだぜ!!」
「ちよつ!どこいくの!?!」

ものすごいスピードでどくろは走って行った。
バタンっ
思い切りよく部屋のドアが閉まる。

誰もいない廊下ではたばたと足音が響く。

つてかさ、あいつら行きそうな所とか知らねえし!!
どうするよ。困るんですけど。
つてか、学校中探し回ればいつかでバッテリーするんじゃない?
よおし!!それじゃ、行くか!!

廊下の角を曲がった瞬間、誰かにぶつかった。

むによん

むによん！？なんだこのやわらかい感触は！！

とっさにどくろは相手の顔を見た。

え・・・・・・・・？

校長・・・・・・・・先生？

「こんな時間に何をやっているのかな？それも、廊下を走って。」

「す、すみません。」

「それと、さっき私の胸にぶつかった事に関しては？」

「本当にすみませんでした！！」

さっきぶつかったのは胸か！！ラッキー！！

って俺は変態か！！そうだな。変態だな。

「君は、何かを探しているのかい？」

「え、まあ。」

「君の探し物は、私についてくればあるかもしれない。」

「え！？本当ですか！？」

「本当だ。ついてくるのかい？」

「ついていきます！！」

やった！！走り回る手間が省けたぜ！！

いい人だ！！校長先生！！

って言うかなんで、ハク達を捜していることがわかったんだろう。

まあ、とにかくすごい人なんだろうな。校長先生っていう人は。

どくろがたどり着いたのは、校長室だった。

「え？校長室にいるんですか？ハク達。」

「君の探し物はハクちゃ、ゴホン！ハク君達なのかい？」

「そうですけど。」

「そうかそうか。それでは、入ってもよいぞ。」

校長室のドアはかなり立派で、かなり重たかった。

「かなり重たいじゃないですか！！」

「そうか？もう慣れたからね。このドアに。」

すげー！校長先生！！

やっと全部開いて、中に入った。

すげえ！！超広いじゃん！！

校長室の中は、赤と黒で統一された、52人のお相撲さんが入っても大丈夫だと思えるほど広々としていた。

ほとんど、本棚と、ティーセットが入っている棚で埋め尽くされている。

床には、読み終わったまま、しまっていない本がちらほらと積み重なっている。

真ん中にある、ソファーと机に、ハク達がいた。

驚いた顔をして、こちらを見ている。

「はあ。躑躅校長先生、なんでどくろ君を連れてきたんですか。」

「なんとなく、探し物を搜していると思ったから……悪かったのかい？」

「かなり悪いわ。」

「それはすまなかった。私はほうつては置けない性格だからね。」

校長先生と親しい関係なのか？
かなり親しく見えるけど。

「君達には感謝していただかなければいけない立場にあると思うんだけどねえ？例えば、この部屋を使ってもよいというのもそうだし。」

え？マジか？いいな！こんな広々としたところを使わせてもらってるなんて！！

「あと、ハクチャ「ストップ」！これ以上話さないでいただけます？これを知らない人がここにいるんですわよ！？」

すみませんね。いちやいけませんでしたか。

「おお。すまないすまない。これは失言だった。」

「相変わらず口が軽いな。校長は。」

「渚、そういわないでくれよ。それでも極力抑えているつもりなんだよ。」

「そうそう。つ・も・り、ね。」

「それは皮肉だな。うーん。ココで言っちゃおっかなあ。」

「だめですわ！！あなたも大変なことになるんですわよ！！」

「冗談だよ。」

なに俺の知らない話を話してるんだよ！！

全然ついていけねえよ！！

「渚、ライト。私を危険な目にさらさないでくれないか？」

「す、すみません。」

「悪かったな。」

「っていうか、

「俺の話を聞け!!」

迷惑そうな顔でどくろの方をハク達が見る。
そんなこともお構いなしに話を続ける。

「俺はな、ハクと喧嘩しに来たんだ!!」

「君、何を言ってるんだい？」

「日本語だ!!」

「すみません。躑躅校長先生。こっちのトラブルです。」

「ふーん。そうか。」

「そう、俺はハクと喧嘩しに来たんだ!!
危ない危ない。忘れるとこだったぜ。」

続く

どくろの暴走と喧嘩の幕明け（後書き）

どくろが暴走しましたね。

一人で、勝手に（笑）

読んで下さりありがとございました。

どくろの暴走と根性（前書き）

15話目です。

よろしく願います。

どくろの暴走と根性

喧嘩しに来たと宣言したとたん、周りの空気が変わった。
ピリピリとした感じの空気。

「蓮君の敵討ちか？そんなの、無駄だ。」

「違う。できれば敵討ちしたいけれど、俺はハクに勝てない。そんなの、とづくに知ってる。」

「じゃあ、どうして。」

決まってるだろ、そんなの。

「蓮と同じ痛みを味わう為に来た！！」

しばらくの沈黙。
からの爆笑。

「くくくっつ！！君、バカじゃないのかい？ハハハッ！！」

何で爆笑されてんの？俺、変なこと言ったか？

え。超恥ずかしいんですけど。

渚も顔を隠して笑っているし！！

「あんたさあ、もしかしてドM！？ありえない！！」

な、ドMだと！？

「ちげーよ！なんで俺がドMになんかならなきゃいけないんだよ！！」

「いや、言動からしてドMだろ。プツ！ふふつつ。」

ハクウウウウウウウウウウウ！！！！！！
爆笑すんな！！お前は喧嘩相手なんだぞ！！

みんなの思考は、

痛みを味わいたい〃痛いのが好き〃ドM
を、3秒間の間、頭に思い浮かばせていた。

「さあ。喧嘩をしよう。思いどおり、蓮君の痛みを……………いや、それ以上を味あわせてやるよ。ドM君。」

カチンッ

「俺はドMじゃねえつつてんだろ！！」

どくろはハクに向かってダッシュした。

そのまま殴ろうとして、勢いをつけたが、ハクは左に避けた。

どくろは、あわてて止まったが、勢いをつけすぎたため前のめりの状態になって、転びそうになった。

「おっとつと。」

「ずいぶん余裕だな。相手に背を向けていられるなんて。」

しまった！！

と、どくろが思って、前を向こうとした瞬間だった。

「かつこいいの、見せるからな！見とけよ！」

「きましたわ！！」

な、何だ？

どくろが前を向き終わる前に、ハクはバック投げをした。

バック投げとは、プロレス用語でいう、ジャーマンスープレックスのことである。この技をかけられた相手は、脳天から落ちていくことになる。うまくいけば首の骨が折れる。

どくろの視界が、急に歪んだ。

ハクの両手の握りが甘かったせいか、後ろに放り投げられただけだった。

「いつて………。何が起こった？」

「よかったな。俺の両手の握りが甘くて。そうじゃなきゃ、お前は首の骨が折れて多分死んでたぞ。」

ちなみに、首が折れて死ぬ原因は、息ができなくなって死ぬか、神経が切れて死ぬかのどちらかである。

ハクはわざと手の握りを緩くしていたのだろう。

「そのまま倒れたままでいいのか？」

「い、今起き上がろうとしたところだよ！！」

今頃どくろは閉め技をかけられていたところだろう。

「完全になめられているねえ。本気を出すまでもないって事かい？」

「そうだと思いますわ。」

くそっ！！強すぎる！！

なんだこの圧倒的な強さは！！

俺が弱すぎるのもあるけど、立ち向かえなくなる強さだ!!

「くっそお!!」

どくろは闇雲にパンチをした。

当然当たるはずもなく、受け止められていた。

「ふっつ!!」

ハクは中断回し蹴りをした。

どくろに襲う、脇腹の痛み。

「いつてえ……………!!!!!!!!!!」

何だこのスネの硬さ!!

左の脇腹をハクは狙った。

どくろは完全になめられているので、右の脇腹は、狙わなかったのだろう。

右の脇腹には肝臓があり、そこに中断回し蹴りがヒットすると、致命的ダメージになる。

「嫌な性格してるよね。ハク君。じわじわと痛みを与えているなんてさ。くくくつ。」

「ハクさんを侮辱しないでくださいます? ハクさんは嫌な性格なんてしてませんわ。」

くっそお! なめやがって!!

でも……………立ち上がれねえ。

くそっ!!

足が震えてやがる！！蓮はこんな奴と戦っていたのか！！

ハクは、思いっきりうずくまっっているどくろの腹を蹴った。

「うぐつつ！！！」

「どくろ君は、これでおしまい、なのか？」

「体が………思うように………動か、ねえんだ！！！」

見下ろしたままの状態で、どくろの顔を蹴る。

「ぐつ！！！」

「痛いのが、好きなんだろ？」

「別に、好きじゃねえよ！」

「そうか。楽に逝かせてやるよ。」

ハクはどくろの後ろに回りこみ、のどを叩いた。

どくろの視界が揺らいで、頭のとっぺんが痛くなるような感じになる。

そして、どくろは気絶した。

「終わりました。躑躅校長先生。」

「見ていて愉快痛快だったよ。ハクちゃん。」

「その呼び方、やめていただけませんか？今は男という設定なのですから。」

「バラしちゃ駄目なんだろう？」

「当たり前ですわ。もしもバラしたりしたら………わかっていますよね？」

「わかってるよ。警察に私に偽りの容疑をかけて逮捕させる。そのあと、牢屋に爆弾を仕掛け、牢屋と私、少しの人もとドゴーン。でしょう？」

躑躅は両手でドゴーンを表現した。

「ところでハクちゃんってドSだよね。」

「よく言われます。」

続く

どくろの暴走と根性（後書き）

自分で書いててハクのドSっぷりに怖くなりました。

ドSっていうか、もはやヤンデレの域に行っちゃった気がします。
読んで下さりありがとございました。

やり場のないこのイラストキと朝の訓練（前書き）

16話目です。

よろしく願います。

やり場のないこのイラツキと朝の訓練

ざわ・・・・・・・・ざわ・・・・・・・・

なんだ？朝から騒がしい・・・・・・・・のわあ！？

どくろは玄関前のフロアにある、銅像につるされていた。
下には、人、人、人。

ちよっ！！待つて！！何でこんなことになってんの！？

昨日の夜、ハクと喧嘩して、気絶して、それから・・・・・・・・それ
から・・・・・・・・何でこんなことになった！？

絶対えあの校長先生かライトっつーやつの子だ！！

っていうか、みんな見てないで降ろしてよ！！頼むから！！

俺、高所恐怖症なんだよ！！こえーよ！！本気で！！

ガラッ

銅像の近くの窓が開いた。

「君、何をやってるんだい？」

「え？」

あつ！あの人だ！！朝の訓練のとき、ぶつかった人だ！！すごく親切な人！！

「ほら、こっちにおいで。そこからなら、この窓にも届くだろう？」
「す、すみません。」

どくろは窓に飛び移った。

「あ、ありがとうございます。」

「はあ。びっくりしたよ。あんなところに人がぶら下がってるなんて。」

「俺も驚きました。朝、目が覚めたらあんなことになってると思いますませんでした。」

「何でって質問しても、多分、君もわかつちないだろう?」

「はい。わかりません。」

だれか一部始終見ている人がいたのならば教えてほしいくらいだ。まあ、あいつらしか知らないと思うけどな。

「君、名前は?」

「え?」

「ほら、いつまでも君って呼ぶのは、変だと思ってね。」

「そうですか。俺、天神どくろっていいいます。」

「僕は桜井戒斗<サクライ カイト>。2年生だよ。」

優しい先輩ここにいたああああああ!!!

優しすぎるだろこの先輩!!!男でも惚れてまうわ!!!

眼鏡超似合ってますよ!

この先輩に出会って本当によかったああああああ!!!

どくろは心の中で号泣した。

「じゃ、僕は先に朝の訓練に行くよ。じゃあね。」

「はいっ!」

どくろも朝の訓練に行く準備をしようと、自分の部屋に戻った。

「蓮？傷、大丈夫か？」

「ああ。とりあえずな。って、お前も顔、ひどいぞ。」

「え？あ。昨日、ハクと喧嘩したんだ。」

「はあ！？何でだよ！！」

ここで、そのまんま言っちゃったら、またドMだって爆笑されんだろうな。

特に蓮だったら気持ち悪いとか言い出すから、

「絶対言わねえ。」

「へえー。何で。」

「何でって！！言ったら蓮に気持ち悪いとか言われそうだからだよ！！」

「じゃあお前は、俺に気持ち悪いとか言わせるような理由でハクと喧嘩したんだな？」

ぐっ！！強い。口喧嘩強い。

「ああそうだよ！！そんな理由で喧嘩したんだよ！！」

「気持ち悪い。二度と俺の前に姿を現すな。」

「何でだよ！！それあまりにもひどすぎるだろ！！」

「冗談だ。」

イラッ

「ほら。早くしないと朝の訓練に遅れるぞ。」

「わあってるよ！！蓮に言われたくねえよ！！」

「そうか。」

・
・
・

今日の朝の訓練は、体育館だった。

朝の訓練の担当が、

「今日は、適当な相手と空手の技のみで試合をしてもらう！！試合の相手は俺が適当に決めるからな！！」

了解しましたあ。せめて弱い相手とさせてくださあい。

「ルールは、俺が危険だと判断した場合、そこで試合終了する。」

え。無理無理無理無理！！

軽く逝くから！！俺！！

「最初は仲居と吉田！」

1年も2年も3年も関係なく本当に適当に決められていく。

「次っ！黒斬と畑山！」

「「はいつ」「」

ハクだ！よし。しっかり見る。

「試合開始！！」

まず、最初に動き出したのは畑山だった。

左順突きをして、間合いを取る。ハクは、後ろに避けた。間合いを取ったところで、畑山が膝蹴りを仕掛ける。

ハクは、相手の左手が下がり、守りが甘くなっただころを、カギ突き（フック）をし、怯んだところを逆突き（ストレートパンチ）をした。

見事、顔面に的中し、畑山は倒れた。

「試合終了！！勝者、黒斬！！」

ハクは涼しい顔でその場を去った。

「すげー。」「早すぎ！！」「かつこよくない？」「強おー」

周りの人たちが口々にしゃべりだす。

「次っ！細燦と遠藤！」

「はいっ！」「・・・・・・・・はい。」

「試合開始！！」

渚が最初に動き出した。

前蹴りをして間合いをとる。

前蹴りは当たらなかったが、素早く切り替えた。

遠藤は、間合いを詰めようと寄ってくる。

渚は動かず、じっと遠藤が詰め寄ってくるのを待っている。

おいっ！！このままじゃやられるぞ！！渚っ！！

遠藤が攻撃を仕掛けようとした瞬間、渚が動いた。

「はっ！！！！！！！」

素早い動きで下突きをする。

みぞおちに命中した。

朝の訓練の担当が危険と判断した。

「そこまで！！試合終了！！」

「まだどちらにも倒れてないだろ。」「何で終わりなんだよ！！」
「早くねえか？」

遠藤はふらつと体育館の中庭に行き、嘔吐した。

「すげえな。3年吐かせたぞ。渚。」

「強すぎだな。ヤバイくらい。」

ざわざわと周りがさらに騒がしくなる。

「やべえよ。今年の1年生。」「超危険じゃん。怖あゝ。」「同学
年にこんなにいるなんて……………」

続く

やり場のないこのイラストキと朝の訓練（後書き）

朝の訓練の続きは17話目に書きます。

多分ハクは試合が終わってからドヤ顔で帰ってきたでしょうね。

そんでライトに「かつこよかったですわ！！さすがですわハクさん
！最高！！」

とか言われてんでしょうね（笑）

読んで下さりありがとうございました。

やり場のないこのイラツキと朝の訓練2（前書き）

17 話目です。

16 話の続きです。

よろしく願います。

やり場のないこのイラツキと朝の訓練2

しばらくして、蓮の名前が呼ばれた。

「次っ！巻と田中！！」

キター！！！！

「じゃ、行つて来るぜ。」

「おう！頑張れよ！！」

田中という男は、体つきががっちりとしていた。たまたま近くにいたので、田中のほうから話しかけてきた。

「俺は6歳ころから空手をやってたんだ。負けるわきゃねえよ。」

こいつ、初対面のくせにずいぶん態度でけえな。
腹立つ性格してやがるぜ。

蓮は田中を無視した。

「ちっ。シカトかよ。一発目かましてやる。」

「大丈夫か？蓮。」

「大丈夫だ。ああ言っている奴ほどそんなに強くない。」

田中は聞こえていたらしく、さらに機嫌を悪くしていた。

「試合開始つ！！」

田中はいきなり力ギ突きをかましてきた。
蓮はそれをあつさりと避けた。

「ふん。□先だけじゃないってことか。」

「しゃべっている余裕があるのか？」

蓮は間合いを取って、二段蹴りを中段でした。

田中の脇腹に鋭い痛みが走り、わずかの間、痛みに氣をとられてしまった。

そこを蓮は見抜き、上段を蹴った。

だが、わずかにかするだけだった。

「威嚇のつもりか？それとも足技が使えるのを自慢したいのか？」

田中の挑発に蓮はイラついた。

それが田中のミスだったのかもしれない。

蓮はハイスピードで上段回し蹴りを繰り出した。

蓮は左利きなのだが、右構えにして、接近したときに左構えに変えたのだ。

そこに田中は幻惑して、その隙を利用して左の上段回し蹴りをしたのである。

それも、美しい回し蹴りで、軸が崩れてなかったのだ。

「ぐふうっ!!」

田中は倒れた。

「試合終了!!」

蓮と田中はこちらに戻ってきた。

「お前、案外強いじゃねえかよ。」

「お前、案外弱いんだな。」

田中はイラツキを顔に表した。

挑発したくせに何もできずに負け、弱いと言われれば腹立つだろう。
田中は蓮と離れた位置に行った。

「蓮って、嫌な相手にはとことん性格悪いよな。」

「そうか？」

「そつえば、咲楽ちゃん見かけないよな。」

「寝坊じゃないか？」

心配だな。昨日だって蓮の看病で遅く眠ったと思うし。

「お前、咲楽の心配してないで自分の心配しろよ。」

「ずっと疑問に思ってたんだけどさ。」

「何だ？」

「読心術使えるだろ。」

「さあな。」

何その反応！！

え、使えるの？使えないの？

「その前にお前、空手できんのか？」

「多分出来るさ。」

「出来ないのか。」

そう。空手なんかやったことない。

「どうしよう。」

「知るか。」

「ヤバイ！…どうしよう！…本気でやばくない！？」

「だから知るか。」

「ひどいよ！！こんな周りにいっぱい人がいるんだぜ！？恥ずかしいっゅーの！！」

「お前、朝の一件でもう恥ずかしいことになってるだろ。」

え？蓮知ってたの？

じゃあ早く助けるよ！！

「お、遅れてすみませんでした！！」

咲楽が体育館に走ってくる。

「なんだ。本当に寝坊だったのか。咲楽。」

咲楽がどくろ達の方に気がついて駆け寄ってくる。

「いやあ。恥ずかしいね。寝坊とか。えへへっ。」

ヤベエ！！

急いで準備してきたせいか、寝癖ついてる！！かわええ！！

「最後、天神と春色！！」

「ええ！？」

そんなっ。

咲楽ちゃんを殴れるか！！

「よかったな。お前。」

「いや、よくねえよ!」

「そういう意味じゃなくて。」

「どついう意味だよ。」

「咲楽、空手、黒帯持つてるぞ。」

ええ――――――!?!?!!

マジでえ!?

「ほら、さつさと行け。」

どくろは驚きながら行った。

「試合開始!」

咲楽が一言、言った。

「どくろ君、ごめんね?」

「え?」

ドゴッ バキッ ドスッ

3秒の間に試合終了がかけられた。

「つよ………すぎ………じゃね………?」

続く

やり場のないこのイラストキと朝の訓練2（後書き）

どくろと咲樂の試合のシーンは省略させていただきました。
書くとなんか同じ感じになりそうだったんです。おいw
読んで下さりありがとうございます。

どくと蓮の療生活（前書き）

18話目です。

よろしく願います。

どくと蓮の寮生活

ある日の日曜日。（日曜日は基本休み）

「ヒマ。」

どくろは課題をやっている蓮に話かけた。

「お前、課題終わらせてねえだろ。」

「当たり前じゃん。」

「やれよ。」

「やだ。めんどい。」

俺は溜めといて、あとで頑張るほうなんだよ！

あーヒマだヒマだヒマだヒマだ。

なんか面白いことないかなー。

ヒマすぎて死ぬ。

「課題、何出たっけ。」

「塩酸の予習と風船爆弾の復習。それと英語のプリントとパズル。」

めんどくさっ！！

量が多い！！

「今どんぐらい進んでる？」

「塩酸の予習と英語のプリント。今、風船爆弾の復習やってる。」

進むのはえーな。

爆弾とかめんどくさいし。

風船爆弾とか、水素ガスがどうのこうのしか聞いてねーよ。
たしか、高度が低下すると、どっかの部品が縮んで電熱線が……
……なんだっけ。忘れた。

「じゃ、俺はパズルから始めよつと!」

どくろは勢いよくベットから飛び降りた。
かばんの中をごそごそして、一分くらいかかって、ようやくパズルを見つけた。

「あつたあつた。」

俺のかばんの中、汚すぎ!!

どくろは床に寝転がってパズルを解き始めた。
パズルは、レオナルド・ダ・ヴィンチの代表作、モナ・リザだ。
箱にレオナルド・ダ・ヴィンチの解説が付いていたが、どくろは思
いっきりそれを見なかったことにした。
箱からバラバラとパズルを取り出して、作業にかかった。

「何これ!! 超細けえ!!」

これ見てれば絶対目がショボショボしてくるぜ!! もう無理だし。
やる気無くすわー。このパズル。

どくろは嫌がりながら作業を始めた。
まずはつながるところからくつつけて、はめるといふ地道なところ
から始めた。

「えっ………とお、これがここでえ………あれ? はま

んないし！」

くっそ。全然進まねえ。

こんなん1年かけても無理だっつーの！

今度は、手当たり次第適当なところにはめていった。

「お、これ以外といけるかも。」

「全然違つところだぞ。そこ、目だから。何で背景のところにあるんだよ。」

「えっ。マジで。」

つていうか何でわかんの蓮。こんな細けえのに。

「とりあえず、パーツだけはめておくから後は自分で頑張れよ。」

「おお！！ありがとな、蓮！！」

蓮は手早くピースを各パースごとにはめていった。

でもさ。俺、わかんない。全力で。

30分経過

「だああああ！！無理！！やってられつかあ！！」

「全然進んでねえじゃん！！」

「だつてさ、わかんねーもん！モナ・リザとか、意味わかんねーし！！」

「パズル自体意味わかんねーだろ。」

パズルとかさ、仮面ライダーとかのピースが大きいパズルしかやつ

たことねえもん!!
小学生以来やってねえし!

それからまた30分経過。

どくろは寝ていた。

「む・・・・・・・・り・・・・・・・・。パ・・・・・・・・ズ・・・・・・・・ル・・・・・・・・。」
「ったく、しょうがねえな。」

蓮はとづくに全ての宿題を終わらせていた。

「こんなん、ラクショーにできるつつの。」

手際よくピースをはめていく。

そして、モナ・リザがうかびあがった。

蓮はどくろの体を揺らして、起こした。

「んがっ!?!ん?パズ・・・・・・・・ル・・・・・・・・。」

「俺がやって「いやったああああああ!!」いつのまにか完成してる!!さすが俺!!超天才!!」

「だから俺がやって「やっぱ俺は天才なんだな。イヤッホー」
ーイ!!!!!!」

プチッ

蓮の何かが切れた。

「だああああああああ!!俺がやったって言うてるだ

ろうがああああ!!」

「ああ!! パズルが!!」

蓮はどくろのパズルをひっくり返した。

どくろはそのあと、大変な思いで、宿題を終わらせたという。

続く

どくと蓮の寮生活（後書き）

やっぱ日常っていいですね。

私も宿題は溜めるほうです（笑）

読んで下さりありがとうございます。

授業と蓮の行動（前書き）

19話目です。

よろしく願います。

授業と蓮の行動

体育の授業

「今回の授業は、柔道をやります。畳を敷いてから、準備体操をしてください。畳はあそこにあります。」

体つきのゴツい先生が指をさして、言った。

「男子は緑色の畳、女子は赤い色の畳を敷いてください。」

体育館をはだしで歩くと足の裏にごみがつくんだよなあ。ああ。水虫うつりそう。

どくろは緑色の畳を持った。

意外と重い。

蓮は軽々と持ち上げて、運んでいった。

「隙間をつくらないようにして敷いてくださいね。足の指を挟んで骨折したら大変ですからね。」

体育の先生が全員に聞こえるように言った。

3分ほどで、畳は敷き終わった。

「では、今日は柔道のさまざまな技をやっていきます。巻君、相手をしてください。」

「はい。」

「背負い投げをしますので、よく見ていてくださいね。」

あー。蓮なら逆に投げるだろうなあ。

「では、いきますね。受身もしっかり……え？」

ドサッ

あ。投げたな。蓮のやつ。

「先生。受身、忘れてますよ。」

「あ、ああ。まさか投げられるとは思わなかったんだ。」

「油断しないでくださいね。いつ殺されるかわからないんですから。今、完璧に俺に殺されてましたよ。」

「そうだね。気をつけるよ。」

あーあ。完全に目えつけられたな。蓮の奴。

「巻君のように、適当な相手と背負い投げをしてください。」

体育の先生の合図で、全員が動き出した。

蓮が戻ってきた。

「蓮。何やってんだ。」

「背負い投げ。」

「いや、それは見たからわかるけどよ、先生投げただろ？」

「投げた。だって自分が投げると思って油断してるから投げてやるうって思っで。」

だからってマジで投げるか？
すげえな蓮。マネできません。

「背負い投げ、練習すつぞ。」

「おう。つか、多分俺がずっと投げられると思うけどよ。」

「ちゃんと練習させてやるよ。」

どくろは蓮を相手にして、素早く体を沈め、相手のふところに入り込む、打ち込みを何度も反復して繰り返した。

ちなみに、背負い投げの動作は、左手を掴んでいる相手の袖を上げ、えりを掴んでいる右手を離す。右足は、相手の斜め45度前に踏み込む。次に、上に上げた袖を前に引っ張り、右手は相手の脇の下に通すと同時に、素早く回転して相手を背負う。一本背負いだ。

「動きが遅い。もっと早く。」

「これでも頑張ってたんだよ!!」

やばい。これ。腕辛いし！

どくろは腕の痛みに耐えながら、頑張つて練習を続けた。体育の時間が終わり、休み時間となった。

「蓮っ!!そういうば……?あれ?どこ行くんだろう。」

蓮が教室と逆方向の所に行く。

「まあ。いつか。」

後で聞いておこう。

続く

授業と蓮の行動（後書き）

短くてすみません。

急用ができてしまったんです。続きは20話に書きます。

本当にすみません。誤字、脱字、意味がわからないところがあったらすぐに聞いてください。

読んで下さりありがとうございました。

授業と蓮の行動2（前書き）

20話目です。

19話目の続きです。

よろしく願います。

授業と蓮の行動2

授業の始まりの1分前に蓮が教室に入ってきた。

「蓮、何やってたんだ？」

「別に。特に何も。」

「ふーん。あつ！俺のさあ、ブタの貯金箱あるじゃん。どこで見かけなかった？」

「そういえば、窓の端っこにあった気がする。」

はああ！よかったあ！！無くしたかと思った！！
あれ。すごく大事なものなんだよね。

「あれ？次の授業なんだっけ？」

「科学だよ。たしか塩酸のことについてだったと思うけど……
・はっ！！」

「どうしたの？」

「蓮、蓮！俺、ちゃんと予習したっけ？」

「お前なあ。俺がつきつきりで教えただろうが！！」
「そうだったっけ？」

あ、そういえばやった気がする。

蓮がすごく頑張ってくれたような……。

ま、半分くらいしか覚えてないけどなっ！！

先生が入ってきて、チャイムと同時に挨拶をした。

「えー。予習はみんなしていると思うから、どんどん進むぞ。教科書の14ページとノートを開け。」

いつもの作業なので、ほとんどの人は言われる前に開いている。どくろは、手がカサカサして14ページをまだ開けずにいた。苦戦しながらも、なんとか教科書とノートを開いた時には、黒板になにやらたくさん文字が書いていて、わからなくなっていた。

全っ然わかんねえ。

「蓮、今どこやってんの？」

「塩酸の危険性。」

うん。わかんない。

わからないまま授業はどんどん進んでいった。

いつもどおり、チャイムとともに挨拶をして、授業は終わった。

「今日ってさ、午前で終わりだよな。確か。」

「え？そうなの？」

「今日は午前学習だ。午後からは特に何もなし。」

「やったあ！」

「よし。寝よう。あ、一緒に飯、食おうぜ。」

確か、今日の昼飯は焼肉定食だったはず！！

「今思ったんだけどさ、焼肉定食って四字熟語？」

「多分四字熟語だよ。」

咲楽ちゃんが言うんだったら四字熟語だよ。

「今日、俺、用事あるから5分で飯食い終わるからな。」

「早くね？つていうか用事つて何？」
「いろいろ。」

いろいろつて……曖昧だな。

ゆっくり飯食わないとのどに詰まるから気をつけるよ。

口に出して言わないけどな！。

なんか最近、蓮のノリが悪いんだよな。すぐにどっか行くし。

………ついて行ってみようかな。

いや、待て待て待て待て。もしバレたら蓮、確実にキレルよな。

蓮がキレたら何するかわかったもんじゃねーし。

「そつえばさあ、巻君つてあんましどくろ君のことを名前で呼ばないよね。いつもお前つて呼んでるよ。」

あ。確かに名前で呼ばれたことあんまりないな。

「じゃあ今度から名前で呼ぶか？」

「俺、どっちでもいいぜ。」

「じゃあ名前で呼んでねっ！」

「………マジか？」

「嫌なのか！？俺の名前を呼ぶのが嫌なのか！？」

ちよ、そんな顔すんなって！マジで傷つくから！俺のガラスのハートが――！

「今度から名前で呼ぶように心がける。」

嫌そうな顔で言うなあああああ――！！

マジでズキツて来たから！ちよっとへこんだから――！！

「早く食べようぜ。急いでるんだ。」

「用事だっけ？大変だねえ。」

「別に大変じゃないが、自分自身のためにやってるって感じた。」

「へえー。偉いな。意外と。」

「意外とって何だよ。意外とって。」

焼肉定食をもって、適当な場所に座った。

蓮は高速で食べて、5分で食べ終わった。

足早に食堂から出て、どこかに行ってしまった。

「どこに行ってるんだろうな。蓮の奴。」

「行ってみたら？」

「バレたら確実に殺されるって！！」

うん。間違っても行くもんか。

俺は危ない橋を渡らない主義なんだ。

……何言ってやがる自分。

「午後から何しよつかな。」

やっぱり寝るしかないっしょ！

よし。課題を早く終わらせて寝るぞ！！

その後どくろは、宿題に苦戦して、やっぱり寝る時間は同じだった。

授業と蓮の行動2（後書き）

蓮サイドで書いてみたいなあ．．．．．。
よし。書こう！いつか。

読んで下さりありがとうございました。

夏と楽しい授業（前書き）

21話目です。

よろしく願います。

夏と楽しい授業

「あつつう・・・・・・・・。」

暑すぎて起きる気がしない夏の朝。

蓮の寝起きの悪さも一段と増している。

「ほら、起きろつて。」

「うう・・・・・・・・無理。」

何度も寝返りをしたせいか、蓮のセミロングの髪に寝癖がついている。

「どくろ、保冷剤くれ。」

「あいよ。」

どくろは冷蔵庫から保冷剤を取り出して、蓮に向けて投げた。首のところに直撃して、わずかに蓮が声を出した。しばらくしてやっと蓮が起きた。顔には疲れの色が見える。

「ダメだ。頭がボーっとする。」

「水を飲め、水を。」

水の入ったペットボトルを蓮に渡す。

「あつつい・・・・・・・・。死ぬ・・・・・・・・。」

ヤバイ。蓮の機嫌が最悪だ。

窓を開けて寝なかったから部屋の中はサウナ状態だし……。

「今日、何曜日だ？」

「土曜日。明日休みかぁ。」

シーツは汗でビシャビシャだし、汗が止まんねえ。

ヤバイよこの暑さ。エアコンないからな。この部屋。

「あ、急がないと。時間がヤバイ。」

蓮やベエ！汗かいてねえし！！すげえ！！この暑さで汗かかないとか！

いいなあ汗をかかない人って。そういう体質なんだろうな。

どくろ達は朝の訓練にギリギリ間に合わせて、クソ暑い中ランニングをした。

「やっと終わったああああ！！きつかった！！」

「シャワー浴びたいね。」

蓮以外、汗だくだ。

「どくろ君、タオル使う？」

咲楽はタオルを余分に持ってきていた。

「使う使う。サンキュー。」

「巻君はいいなあ。汗がなくて。」

「汗臭くないなんて、男じゃないぜ！！」

「うざい。こういう体質なんだよ。俺は。」

「次の時間体育だよっ！！プールっ！！」

「おおっ！？マジでか！？ラッキーっ！！」

やった！プールだ！思いつきり泳ぎたいぜ！！

アカデミーに通ってたからな！！泳ぎだけは自信あるぜ！！

それと、咲樂ちゃんの水着が見れる！！

・

・

・

「う、嘘だろ？」

いやっほおおおおおい！！！！！！！！

体育の先生が熱中症で倒れて、代わりに遙先生が教えてくれるって
よ！！！！！！！！

なんてパラダイス！！

どくろはウキウキ分で着替えた。

どくろは、着替えている蓮の方を、チラッと見た。

うお！？何だあの筋肉！！

やばっ！かけー！！髪の毛を結んでるし！！

服着てたら、ただのヒョロ男のくせに、脱いだら細マッチョかよ！
すげーな。

どくろはあわてながらも着替えた。

後ろから、蓮が話かけた。

「着替え終わったか？」

「おう。見てのとおり、着替え終わったぜ！ゴーグルもちゃんと持ったし！」

更衣室を出て、先生のいる方へ行った。

「つつつつ……！！！！！！！！」

遥先生！！なんて欲張りボディ！！

ボンツキュツボンじゃないですか！！

ヤベエ。興奮してきた！！うおおおお！！！！

「巻君、どくろ君。スクール水着なんて、初めて着ただけど、どうかな？」

咲楽ちゃんキタアアアアアアアアアアアアア！！！！！！

意外と胸おつきい！！Dカップくらいあんじゃね？

これ夢じゃないよね！？夢じゃないよね！！！！

「巻君、また筋肉付いたねえ。かつこいいい！」

俺も咲楽ちゃんにかっこいいって言われたい！！

ああもう！！ズルいぞ！！

「蓮。日影行こう。ここ、暑すぎ………はあ。」

蓮の方を向くとキヤーキヤー言われながら女子に囲まれている。

「蓮君つ。腹筋触らせてよお。」「ちよつと触らせてえ。」「減る

もんじゃないしいじゃんっ！」

すごいな。イケメンと呼ばれる人間は。

少し腹筋がわれてるくらいでキャーキャー言われてさ。

まあ、蓮はクラスの中でもモテてるけどさ。

ほかのクラスの人たちも見に来たりしてるけどさ。

べつ別に羨ましい訳じゃないんだからなっ！

……すみません。素直に羨ましいです。俺も黄色い声を浴びたいです。

「おい。お前らさっさと並べ。準備運動するぞ。」

先生の声で、全員並び、準備運動をした。

一人ずつプールに入り、背の順に並んだ。

「うひょー。冷てー。」

ひんやりとしたプールの水が体を冷やす。

外にプールがあるからか、わずかに葉が浮かんでいる。

「えー。いきなりだが、このボールをみんなで5分の間、取り合ってもらおう。最後に持っていた奴には……うーん。どうしようか。」

みんながそれぞれ提案を出し合う。

その中から、先生が適当に決める。

「じゃあ。巻蓮の体のいろんなところを触っていい権利と、私の体のいろんなところを触っていい権利を10秒だけあげよう。」

女子はキヤーと喜び、男子は蓮以外、うおおお！！と雄叫び（？）をあげた。

よっしゃああ！！張り切るぜ！！

「では今から5分間！！いくぞ！！」

ボールをプールに放り投げた。

ちょうどよく、咲楽のところにボールが行き、反射的にボールを掴んだ。

ボールのところに人が雪崩のように集まった。

「咲楽ちゃん！！危ない！！」

咲楽はプールから飛び出して、上から降ってくる人達を竜巻旋風拳（笑）で蹴り飛ばした。

「ふぐうつ！！」

どくろは飛んできた人にぶつかった。

「あ。足がすべっちゃった。ごめんね？」

いや、これ、足がすべったの問題じゃないでしょお！！
攻撃してるよね！？攻撃してるよねえ！？

咲楽の手からボールが滑り落ち、水の上にプカプカと浮かんだ。
咲楽の竜巻旋風拳から逃れた人達が一気にボールに集まった。

くっそ。水の中だから動きにくい！！

どくろは泳いでいけばいいのに、わざわざ歩いて移動していた。どくろの目の前で、ボールの奪い合いが繰り広げられている。

「ん？あれ？なんか人が沈んで・・・・・・・・？」

ボールを奪い合っている人達がどんどんプールの中にもぐっている。いや、沈んでいるといった方が正しいかもしれない。

どくろがプールの中をのぞくと、異様な光景を目の当たりにした。

ええーーーー。何やってくれちゃってるんですか。蓮は。

水の中で思いつくそ殴ったり蹴ったりしてんじゃん。

やがて人がボールの周りからいなくなっていた。

ボールの近くで蓮がプールから顔を出した。

息が切れていた。よっぽど息を止めていたのだろう。

「終了。ボールを持っていたのは・・・・・・・・蓮か。予想どおりだな。」

「ぶー。私、頑張ったのになあ。」

蓮が権利を使わなかったのは言うまでもない。

続く

夏と楽しい授業（後書き）

クソ寒い中、夏の話を書くのはなんだか複雑です。
読んで下さりありがとうございます。

初仕事と人形（前書き）

22話目です。

よろしく願います。

初仕事と人形

「昨日は楽しかったあ！」

「咲楽ちゃん、はしゃぎすぎだったし！」

今日は昨日のプールの後の日曜日だ。

若干筋肉痛・・・・・・・・っていうか全然泳げてなかったし！！

「っていつか蓮はさ、何で昨日張り切ってたんだ？」

「俺の体を触らせなくなかったからだ。思い出しただけで鳥肌が立つ。」

そういうことか。

ま、もし俺が権利を得たら・・・・・・・・

「どうしたの？どくろ君。鼻血出てるよ？」

「いやらしいことでも考えてんだろ。」

「いやだあ。どくろ君、変態！」

「いや、違うつて！！別にいやらしいことなんか「考えてたんだろ。」

正直に言います。考えてました。

だって、あのいやらしい体の遥先生だぜ！？

男なら一度でも考えたことあるでしょ！！

「そろそろ仕事しないか？」

「何だよ。いきなり。」

俺が秘する妄想をしている時にいきなり・・・・・・・・っていつか思

いつきり話の腰折りやがったな。

「そうだね。そろそろ仕事したいなあって思ってたんだよね。」

「え！？あ、お、俺もちょうど思ってたんだよなあ！！」

嘘ですけど。

「じゃ、受付のところ行くか。」

受付は職員室の近くにあり、受付嬢がにこやかに待ち受けている。

日曜日なので、仕事をする人がやけに多い。どくろ達は列に並んだ。その中には、ハク達の姿もあった。

どくろは、ヒソヒソと蓮に耳打ちした。

「ハク達、あそこにいる。」

「知ってる。何だか久しぶりだな。」

あの出来事以来、ハク達を食堂や部屋、廊下などで一切見かけない。

どこに寝泊りしているかはどくろは知っているが、蓮は知らない。

「どうしよ。こっちに来るよ。」

ヤバイヤバイ。鉢合わせになって気まずい感じになったら、もう俺、無理だから。倒れるから。

「あ！ライトちゃん！」

おいーーーーー！！！！

なんてことしてるんだ！咲楽ちゃん！！

ほら、こつち睨みつけてるよライトっていう人が！！
気づいてハクと渚もこつち見てるし！！

「久しぶりだねえ。ずっと部屋に来ないから心配してたんだよ？」

「・・・・・・別に、あんたに心配してもらっ筋合いなんてないわ。」

相変わらず態度悪いなあ。こいつ。

「ライト。行きましょう。仕事がありますから。」

「すみません。ハクさん。」

そう言つて、職員室の方に、外出届を出しに行った。

「久しぶりに声を聞いたな。なんか他人みたいだ。」

「俺達だって赤の他人だろ。」

「そうだけどさ。なんか、こつ、関わりがないっていうか、なんというか・・・・・・」

「どくろ君の言いたいこと、分かる気がする。なーんか冷たいよね。ライトちゃん達。」

そう言っている間に、前の人が受付から去っていった。

「お、俺達の番だぞ。ボーっとすんな。どくろ。」

「えっ！？ああ、そうだな。」

忘れてたぜ。俺達は並んでたんだった。

おっ！綺麗なお姉さん！！受付嬢か。

「お仕事ですか？」

「あ、はい。」

びっくりしたー。

勢いで返事しちゃったよ。

「ランクは何ですか？」

「何にする？」「Dで。」「Dだよね。」

「じゃ、Dで。」

やっぱりDランクだよな。初心者ですから。

「Dランクのお仕事は、1つしか残ってないのですが……」

「んー？お人形を捜してください？」

「これで良いんじゃないか？楽だし。」

「じゃ、これで決定でー！！」

「かしこまりました。」

受付嬢がなにやら紙に書いて、どくろに渡した。

「この紙を担任の人に渡し、外出届を出してください。依頼者は10代の少女で、学校の近くの公園で待っているそうです。説明を聞いてください。」

「は、はあ。」

一気に説明されたんで、ちょっとわかんないけど、とりあえず公園行ったらいいんだよな。

職員室に行き、遙先生に外出届を出した。
なんだかめんどくさそうに、

「ああ。わかった。」

と、事情を言う前に言われたので、どくろは少しうつろたえながらも、外出届をGETした。

「よおーし！いつくぞー！！」

「張り切ってるね！どくろ君。」

「一緒に行動していると本当に恥ずかしい。」

「えっ！？そうなの！？そんなこと考えてたの！？」

「いつもな。」

マジか。なんかごめんな。蓮。

「じゃ、行くぞ。咲楽、どくろ。」

「うんっ！」

「応っ！！」

昼前、勢いよく玄関から足を踏み出した。

続く

初仕事と人形（後書き）

やっと仕事までいけました。

読んで下さりありがとうございます。

初仕事と人形2（前書き）

23話目です。

よろしく願います。

初仕事と人形2

「今日はよく晴れてるなあ。」

雲一つない快晴！！

あ、大きい雲があつた。

「大きい入道雲だねっ。」

夏ならではの入道雲が空に浮かんでいる。

風も涼しく、昨日よりは暑くない。

でも、ガラガラと照りつける真夏の太陽がどくる達を襲う。

「今日も暑いな。」

「アイス食いてえ。」

俺の家の近くに今では珍しい駄菓子屋があるんだけどなあ。

おっちゃん、今、何してるかな。

きっとエロ本でも読み漁ってるだろうな。

客がいても読んでもからなあ。おっちゃんは。

「やつと公園についた！日影！！日影行こうぜ！！」

「待てよ。まずは依頼主を捜さなきゃいけないだろ。」

「あつ。忘れてた。」

「忘れちゃダメでしょ？」

確か10代の女の子だっけ？
っていうかさ、人少くない？

「ねえねえ、あの子じゃない？女の子って。」

咲楽が指をさしたのが、背の小さい、いかにも小学1年生みたいな女の子だった。

「いや。あれは違うんじゃない？」

「小さすぎるだろ。10代に見えねえよ。」

「人は見かけによらないの！巻君っ！」

咲楽はそう言つて、あの女の子に駆け寄つて行つた。

「私達に探し物をしてほしって頼んだのは君かな？」

「そうだけど。」

うわっ 無愛想な奴！！

つていうかこいつが10代の女の子！？小さすぎるだろ！！

「人形を捜してほしいんだっけ？」

「そうだけど。」

「最後にあつたのはどこかな？」

「いつも抱っこしていたんだけど、学校には持っていけないから、部屋に置いといて、帰ってきたらなくなつてた。」

ここは咲楽ちゃんに任せよう。

俺は苦手なんだ。無愛想な奴が。

だつてさ、話続かないじゃん！！しらけるじゃん！！

「何年生なの？」

「答える必要はないと思うけど。」

「4年生？」

「違うし。」

え!?

じゃあ小5か小6!?

マジでか。ちっちゃすぎだろ。

「人形はどんな形?」

「ウサギで、背中に数字を入れたらロックを解除できるやつがついてて、全体的に白色。誕生日にお母さんが買ってきてくれたの。でもロックを解除できる数字は絶対に教えてくれなかったの。」

こいつ、人形のことになるとよくしゃべるなあ。

それだけ大事って事か。

名前、まだ知らないんですけど。

よし。聞いてみるか。

「君さ、なんて名前?」

「藤村 鳴海<フジムラ ナルミ>だけど。」

「へ、へえ。いい名前だねっ。」

やっぱり態度悪っ!!

絡みにくい!!

「全然いい名前じゃない。離婚したお父さんがつけた名前だから。」

結構複雑な家庭の事情キターーーーー!!!!!!

超絡みにくいから!!!!

なんかごめんね? いい名前と言っちゃって。

「とにかく搜そうぜ。その人形ってやつ。」

「そうだね。」

「家の周りから搜してみるか。家、どこにある？」

「ここから右に曲がったところの商店街の手前。」

さっそくどくろ達は鳴海の家に行った。

「・・・・・・・・広っ！！！！！！！！！！」

何だこの家！！もはや城じゃん！！城！！

「家の中は家政婦に全部搜させた。けど見つからなかった。」

「じゃ、俺とどくろは商店街を調べるから、咲楽と鳴海は家の周りを調べてくれ。何かあったら絶対にケータイで連絡しろよ。今は11：30だから、12：00までに鳴海の家に集合。」

「うん。わかった！頑張ろうねっ鳴海ちゃん！」

「本気で搜してよね。」

どくろと蓮は、商店街の方へ行き、担当を決めた。

「どくろは商店街全体を搜してくれ。俺は聞き込みをする。何かあったらケータイで連絡しろ。」

「おうっ！わかったぜ！！」

分かれて行動するのは正直心細いけど、一肌脱いでいっちょ頑張るか！！

どくろは、急いで搜したが、今は昼時。人ごみの中では走りたくても走れない。

それに、まず動けない。

どくろは一旦路地裏に行った。人通りがない。

「ここですぐに。」

人ごみの中で捜しても見つかる気がしねえし、ただ疲れるだけじゃん。

ドンッ

誰かがどくろの肩にぶつかった。

「つと、すみません。」

「チッ。」

「……なんなんだ人にぶつかつていてよお。」

でも黒いスーツ着てたし、黒人だし、白いウサギの人形持ってたし、体格もよかったから、頭の良い俺は喧嘩を売らなかつたぜ。

ただヘタレだけです。調子こいてすみませんでした。

「……え？」

「白いウサギの人形お！？」

さっきの黒いスーツの黒人は、右の角を曲がっていった。

どくろは黒いスーツの黒人を追いかけた。

黒いスーツの黒人は、白いアパートの階段を上っていった。

どくろはケータイを開いて、蓮に連絡しようとしたが、時刻は11:57。商店街を急いで抜けないと間に合わない。

急いで鳴海の家に戻った。

「やっときたか。2分の遅刻だ。」

「いいじゃん。2分くらい。」

「咲楽たちは人形、見つかったか？」

「全然。聞き込みとかしたけど、なんにもわからなかった。」

「そうか。どくろは？」

「黒いスーツを着た、黒人の男が、白いウサギを持っていたのを見たぜ。」

そういつた瞬間、全員が驚きの表情を浮かべた。

「奇遇だな。聞き込みをしたところ、黒いスーツを着た、黒人の男が白いウサギを持っていたという証言があったんだ。」

「……あやしい。」

完璧あやしい。

「鳴海、家政婦とやらに家に盗聴器と盗撮カメラが仕掛けられてないか確認させてくれ。」

「わかった。」

鳴海はケータイを取り出して、家政婦に盗聴器と盗撮カメラがないか調べさせた。

「これはただの探し物じゃねえな。」

「そうだねえ。大変なことになったね。」

「なんでそんなに落ち着いてられんだよ！！事件のフラグが立ちまくりじゃねえかよ！！」

これがDランクの仕事か！？危険すぎるだろ！！

続く

初仕事と人形2（後書き）

鳴海ちゃん、シンデレレのデレがないですね。
私思うに、鳴海ちゃんはシンデールです。
読んでくださりありがとうございました。

初仕事と人形3（前書き）

24話目です。

よろしく願います。

初仕事と人形3

今、俺は、黒いスーツを着た黒人が入っていった白いアパートの前に来ている。

え？なぜかって？俺の方が聞きたいぜ。

そういう流れだったんだよ。

あれは近くのファミレスで昼飯を食っていたときのことだった・・・。

「人形を取り返すにはお前が見た、白いアパートに潜入しなきゃいけないな。」

「そうだな。どうやって潜入するんだ？」

「もちろんどくろが。」

「え？」

「すごい！どくろ君！！大役だねっ！」

「え？待つて？」

「頼んだから。絶対人形を取り返してよ。」

これって俺が潜入する系！？

嘘！？マジで！？

「俺が予想するに、あの人形の中に入っている何かをあの黒いスーツを着た黒人が狙っているわけだ。まあ、単体ではないだろう。大きな組織だ。んで、今は暗証番号が分からずジタバタしているわけだ。このままだと鳴海が危ない。」

「それで、俺に行けっていうことか？」

「そういうことだ。俺は外で見張っているからどくろは正面から行け。」

「ちよっと待つて。死ぬじゃん。俺、確実に死ぬじゃん。」

どくろは身振り手振りで危険ということをアピールした。
どうしても一人で行きたくないのだろう。

「大丈夫だ。黒いスーツを着た黒人がどくろに気を取られている間、
咲楽が人形を取り返す。」

「What!？俺は罔か!？」

「そういうことだ。」

あれ？ちよつと待て。

何で黒いスーツを着た黒人達は人形を引き千切って中身を取り出さないんだ？

「なあ。なんでロックをわざわざ解除しようとしてるんだ？あいつらは。人形を引き千切っちゃえばいいのによ。」

「あの人形は何で引つ張ろうと何できろうと絶対に破れない繊維でできているから。無理。」

ああ。なるほどね。

「じゃ、ここに無線機があるから何かあつたら知らせてくれ。」

そう言つて蓮は、それぞれに無線機を渡した。

「……………罔は俺で決定したのか!？俺が死んでもいいのか!？」

「じゃ。移動するぞー。鳴海は危ないから、家にでも隠れてろ。」

「うん。わかった。」

・

・
・
ということで、俺が今ここにいますとさ。
どうする。どうする俺！！！！！！
行くしかないんだけどさ。

どくろは震える手でインターホンを押した。

ピンポン

その音が、大変なことになった。

黒いスーツを着た黒人の男がドアを開けた。

「あ、あのー。白い、後ろに鍵がついた、ウサギの人形を持ってますよね？返していただけませんか？」

「才前、誰ダヨ。」

そんなこと別に聞かなくていいだろおおおお！？

早く人形持つてこいやああああああ！！！！！！

早く帰りたい。早く帰りたい。早く帰りたい。早く帰りたい。

「俺っすか？」

「イヤ、チゲーヨ。」

え？じゃあ誰だよ。

っていうか態度悪いなこの黒人。

外国の奴ってこんなだったっけ？

「才前の後ろっ！グフウッ！！」

何が起こった？

「！？」

どくろが後ろに引っ張られた。

どくろがその姿を確認すると、赤いマフラーが見えた。
そう。黒斬ハクだ。

「ハク！？どうしてここに！？」

「・・・・・・・・・・。」

シカトですか。

っていうか何でここにハクがいるんだよ！？意味わかんねえ！？

どくろは無線機を取り出して、蓮に報告した。

「蓮！ハクがこっちに來たんだけど！！」

>ああ。こっちも渚が來たぞ。

「ハク、思いつきり突入していったぞ！？」

>多分あいつらも、人形の中身を狙ってるんだな。

「咲樂ちゃんは無事か！？」

>知らないが、咲樂の方もライトが行ってるだろうな。

「どうしよう。俺。困ったわぁー。助かったけどさ。」

>どさくさにまぎれて人形取って來い。

「え！？正気！？」

>正気だ。さっさと取って來い。3秒以内に。」

「え！？ちょっ！待て！！」

蓮からの返事は来なくなった。

「くっそ。何なんだよあいつ！人事だと思いやがってよ。」

でも、なんだろうな。このワクワクした気持ちは、
なんか胸からゾクゾクッってする感じ。

「よっし。いっちょ頑張ろうかなっ！！」

どくろは入り口を覗くと、ハクとライトが中にいる、外国人たちと戦っていた。
壁をなぞるようにして、「どくろは人形があると思われるリビング
に向かった。

廊下では、ハクが自分よりも大きいラフな格好をした黒人と戦っている。黒いスーツを着た黒人は気絶していた。

どくろはサササツと廊下をぬけると、リビングにたどり着いた。
リビングではライトが軽々と家具を持ち上げて、黒人達に投げつけていた。

「あたしい、意外と力持ちなんですわよっ！！」

手当たり次第、何でも投げつけていた。ダンスやイス、テーブルまでも。

「…………力持ち過ぎるだろ。俺は夢でも見てんのか？あんなの、
アニメでしか見ねえよ。」

人形はどこだ……………？

どくろはきよろきよろと捜していたら、大きい人影が目の前にあっ

た。

「うお！！」

反射的に横に避けたら、どくろの後ろにいた人と激突していた。

「あはは。俺も結構やるじゃん。あ。人形だ。」

ライトが投げつけたテーブルの横に、ウサギの人形があった。

どくろはそれを拾うと、一目散に咲楽の方へ逃げるようにして行った。

「取った取った取った取った！！！！人形！！」

「わああ！やったね！どくろ君！！おめでとう！！」

どくろと咲楽は裏口から出て行き、蓮の方へ走っていった。

「蓮っ！！やったぜ！！人形GETした！！」

「おお。やったな。」

予想外の流れだったけど、なんとか人形を捜し出したぜ！！よく頑張ったぞ俺！！

ハク達がいなかったらどうなることかと思っただ。ナイスタイミング。

どくろ達は、人形を渡しに行った。

鳴海は家の前で出迎えてくれていた。

「あっ！！」

どくろの手の中にある、ウサギの人形に気づいて、とてもうれしそうな顔で駆け寄ってきた。

「ありがとう！！見つけてくれたんだ！！」

「おうよ。俺が一生懸命、頑張ったんだぜ。」

「ふーん。」

やっぱそっけねえな。このガキ。せっかく人が頑張って捜してやったのに。

ま、ありがとうって言われたから、正直嬉しかったけど。

「でさ、このロックを解除できる？できたら解除してほしいんだけど……。」

「多分さ、お前の誕生日だと思うぞ。」

「おっ。さすがだな。蓮。なんかありきたりだけどさ。」

鳴海は自分の誕生日を数字に当てはめた。

カチャッという音がして、見事にロックは開いた。

「中身、何が入ってたの？」

「DVD。」

「見てみようぜ！！せっかくだから！！」

「別にいいけど。」

続く

初仕事と人形3（後書き）

この話に出てくるウサギの人形ってどれくらいの大きさなんでしょうね。

そこまで設定していなかったんですけど、DVDが入る大きさってそうとうな大きさなんじゃないかと思っています。

読んでくださりありがとうございました。

初仕事の終了と帰り道（前書き）

25話目です。

よろしくお願いします。

初仕事の終了と帰り道

さっそくどくる達は人形の中に入っていたDVDを見た。
テレビには、鳴海のお母さんと思われる人が映っていた。

「人形のロックを解除したのね。鳴海ちゃん。」

とても嬉しそうな顔をしている。

「このロックを解除したのは、ああ高校（仮）の人かしら？鳴海ちゃん
は頭が固いから、きつとわからなさそうなものね。（クスッ）」

全てを知っているような口ぶりで話を続ける。

「4455676。この数字が大事になるかもしれないわ？覚えておく
といい事あるかもね。」

謎の数字を口にして、終了した。

「いったい何を言いたかったんだろうな。鳴海のお母さんは。」

「知らない。」

「でもよかったねっ！お人形さんが見つかったー！」

「予想外の展開に正直あせったぜ。」

「さ。帰るとするか。」

豪華な玄関に行き、鳴海と別れる。

「じゃあね。本当に、人形を捜してくれてありがとう。」

「バイバイっ！鳴海ちゃんっ！」

「じゃあな。」

「よかったな。人形が見つかった。じゃ、帰るな。」

鳴海は会った当初とは比べ物にならないほどの笑顔でどくる達を見送った。

「はあ。今日一日かなり疲れたぜ。っていうか！！すげえ危険だったんだぞ！あの場所！！ハクとライトがすげえ危なかったんだぜ！！ライトなんか家具投げてたからな。」

「すごいライトちゃん！！」

「あ、噂をすれば。」

目の前には、ハクと渚とライトが歩いていた。

「ライトちゃん！！」

前の3人は振り返った。

なんだかスツキリとした表情で。

「何でライトちゃん達、あの場所にいたの？」

「ああ。仕事よ。シ・ゴ・ト。あんた達みたいな楽な仕事じゃなくてね。」

「怪しい動きをしている黒人がいるから、懲らしめてくれっていう仕事だったんだが、あそこにどくる達がいることは予想外だった。」

「俺もさ、緊張してインターホンを押して、超コワイ黒人が出てきてさ、ビビッてたのさ。そしたらいきなりハクが出てきて超、焦ったから！！」

「で、あの黒人達はどうなったんだ？」

「あの黒人達は指名手配されてたらしく、警察に突き出したが。」

「そうか。」

ともあれ、なんとか仕事をこなすことができたんだからいいよなっ
！！

なーんかスツキリした！！

「あ、課題なんだっけ？」

「読書感想文と数学のワークの5〜12ページ。それと薬物のことを自分なりにまとめる。」

「無理。絶対終わらないから。」

「今日こそは手伝わないからな。」

そんなことを話している間にも、世界のどこかで大規模な計画が練られていたことをまだどくろ達は知らない。

初仕事の終了と帰り道（後書き）

短くてすみません。

なんかいつのまにかどくろ達とハク達が和解したみたいになっ
ていますけど、喧嘩した後って、他愛もない事で仲直りしてしまうから、
これでいいかな。見たいな感じでやっちゃいました。急いで書いた
ので誤字や脱字、意味が分らないところがあるかもしれないので、
あったら教えてください。

読んでくださりありがとうございました。

ん?とまさかの・・・(前書き)

26話目です。

よろしく願います。

ん？とまさかの……………

いつも通りに朝の訓練を終えたところだった。

「ああー！。今日の訓練はかなり疲れたああー！！！」

「明日、筋肉痛になるな。」

「疲れたねえ。」

今日のはさすがに息切れしたぜ。

蓮も疲れてるもんな。

「……………けて。」

ん？

「なんか言った？」

「は？何もしゃべってねえけど。」

「どうかしたの？」

おかしいな。確かに蓮か咲楽ちゃんが何か言った気がしたんだけどな。

「……………けて。助けて。」

っ！？

蓮と咲楽ちゃんの声じゃない！！

どくろは辺りをキョロキョロと見渡した。

「どくる君？何を探してるの？」

「いや。誰かが助けてって言うてる気がしたんだけどさ。」

「気のせいじゃないか？」

うーん。疲れてるのかな？

多分、気のせいかな。

「・・・・・・・・たす・・・・・・・・けて。」

うん？

「ほら、聞こえないか？さっき助けてって聞こえたんだけど・・・・・・・・」

「聞こえねえよ。」

「怖いよお。どくる君。」

「ちよつと俺、探してくる！！」

授業は・・・・・・・・ほつとけ。

今は誰かが助けてって俺を呼んでるから助けに行くだけだ！

どつから聞こえてきたっけ。

たしか・・・・・・・・グラウンドからだ！！

グラウンドから聞こえてくるのは多分テレパシーとか使える奴だから・・・・・・・・かな？

グラウンドに行くが、誰もいない。

倉庫のほうに行くと、異様な光景がどくるの目の前に広がっていた。

「これは・・・・・・・・河童か？」

河童がロープに絡まっている・・・・・・・・のか？

「うう……そこにいる人、どうか僕を助けてください……」

「わ、わかった。」

ロープをほどくと、深々と河童が頭を下げて、お礼を言った。

「心優しい方、この度は助けていただきありがとうございました。」

「え？ いや、なんか、助けてって聞こえたから……」

「僕の声が聞こえるとは！！あなたは人間ですよね？」

「人間です。 正真正銘。」

河童よ、俺は妖怪じゃないから。 人間だから。

ってか何この展開！？まさかの河童との出会いがあるとは！！

「ぜひ、僕の仲間に紹介したいです！！着て頂けますか？」

河童はキラキラとした目でどくろを見つめる。

どくろは完璧に引いているが、河童の一生懸命な姿に負けた。

「行きたい……かな？」

「いいのですか！？あ、ありがとうございます！！恐縮です！！」

こ、こんなに感謝されるんだな。

なんか超いい性格の河童だな。 河童って大体こういう性格なのか？

「心優しい人間様に出会えて本当に嬉しいです！！感激です！！」

「いやいやいや、そんなに感謝されるようなことしてないと思うけど……」

「僕、人間と会話するの初めてなんですけど、人間がこんなにいい

人だとは思いませんでした！僕の仲間は、人間に会うといじめられるとかって言うから、恐ろしい生き物だと思っていましたが、思い違いしてましたー！！」

いつのまにか深い深い森まで来ていた。

河童に案内されるままに、歩いていき、草花のトンネルを潜ると、広い場所に出た。

「ここは………？」

「みんなあー！！！！！！こっちに来てくださあー！！！！いー！！」

河童がそう言うと、葉っぱなどから妖怪と思われるものが、ゾロゾロと出てきた。

大きいから小さいもの、ドロドロとしたものから二足歩行するものまでいた。

「ひっひいー！！こいつは人間じゃないかい！？なんてものを連れて来てるんだい、河童ー！！」

「違いますよ。この人間様は僕を助けてくれた、心優しいお方なのです。」

なんか俺、場違いじゃないですか？

なんか怖いんですけど。人間じゃないものに囲まれてるとか。

奥から、貫禄のあるボスのような妖怪が出てきた。

「人間殿、河童を助けたという話は本当かね？」

「ロープに絡まっていたのを助けました。」

「これはこれは。河童を助けていただき真にありがとうございます。」

ほら、お前達もお礼を言いなさい。」

どくろの周りを取り囲む妖怪たちもお礼の言葉を言った。

「いえいえ、当たり前のことでしたですから。」

「なんてお優しい方なんだ！！人間殿、私達なりにお礼をさせてください！！」

「え！？」

「遠慮なさらずに、ほら、こっちに来てください。」

ええええええ！！！！！！

なんか凄い事になっちゃったんですけどぉ！？

「ほら、お前達、人間殿におもてなしをしなさい。」

いそいそと妖怪達が働いている。

キラキラとした着物を着た、女？の妖怪達がどくろを取り囲む。

「あんた、すごく変わった格好をしているねえ。これが人間の着る洋服っていうやつなのかい？」

「ええ。そんなところでしょうかね。」

うわぁ。何だろう。この安心感。

「人間様、どうぞココへお掛けになってくださいまし。もうすぐ料理が来ると思いまし。」

「えうあ、ありがとうございますぅ・・・・・・・・・・。」

どくろは完全にテンパっている。

ちょうど料理が来たのだが、見た目は黒くドロドロ、匂いはすっぱい匂いだ。

食べる気が失せるような感じた。

「いや、何か食欲がなくて……………」

「遠慮なさらずに食べてください。とても美味しそうじゃありませんか!?!」

これのどこが美味しそうなんだよおおお!!!!!!

なんかプシューつつつて黒い気体が出てきてるから!!

無理!!見た目だけで吐けるよ!!

ここは……………食べるしかないのか!?

「い、いただき、ます。」

素手で料理を掴み、口に運んだ。

頭に衝撃的な痛みと全ての感覚がなくなった。

・

・

・

目を覚ますと、いつもの2段ベットに寝ていた。

「? あれ?」

夢……………か?

「大丈夫か？すごいなされてたぞ。お前。」

「何か妖怪の夢を見てな。暗黒物質を食べさせられたんだ。」

「何だそれ。」

続く

ん？とまさかの・・・（後書き）

個人的に書いて面白かったです。

読んでくださりありがとうございました。

夏休みの始まりと久しぶり！（前書き）

27 話目です。

よろしく願います。

夏休みの始まりと久しぶり！

7月31日

「明日から8月31日まで夏休みだ。まあ、夏休みといっても仕事か課題しかやることがないと思うが。」

やった！やっときたぜ！

夏休みという長期間の休みが！！

「体が鈍らないように毎日トレーニングはしておくんだな。さて、今から課題を配る。きちんと名前をつけておくんだぞ。」

課題を配り始めるが、かなり山盛りになった課題が教壇の上にあるため、どくろのテンションはガタ落ちになった。

配られた課題は、プリント集やドリル、画用紙や作文用紙やテキストも配られた。

「夏休みは問題など起こさずに普段通りにしている。たとえ乱闘があっても止めることはないからな。学校の情報を流すとか、校舎を燃やすなどのバカなことはするなよ。それでは、これで終わりにする。終わっていいぞ。」

挨拶をして帰りの準備をする。

蓮が大きなため息をついた。

「珍しいな。蓮がため息をつくなんてさ。」

「別に。」

「あれ？巻君、顔に切り傷が付いてるよ？」

「え？どこどこ？」

「ここだよ。」

「咲楽ちゃんよくわかったなあ。普通に蓮の顔見てたけど全然気が付かなかったぜ。」

蓮の頬に何かで切られたような切り傷があった。

蓮はそんなことは気にせずに帰りの準備を終えた。

「何でそんなところに切り傷が付いてんだ？」

「知るか。どこかでいつの間にか切ったんだろ。ほら、早くしねえと先に帰るぞ。」

「待つて待つて！今すぐ終わるから！！」

慌ててどくろは帰りの準備を終えて、蓮と一緒に部屋に戻った。

部屋に戻ると、嬉しいことがあった。

「ハク！渚！」

「何だ。戻ってきていたのか。」

「まあな。」

「戻ってきちゃダメだったか？」

「全然全然！！逆にOK！！」

ヤベエ！！

超、嬉しい！！

この部屋、超広いから俺と蓮だけ使つとかなり余るからちょっと寂びしかったんだよなあ。

校長先生の部屋の方が断然広いんだけどな。

「かなり久しぶりだよなあ。この部屋にハクと渚がいるの。」

「俺とどくろだけじゃあ広すぎんだよこの部屋は。」

「そうか。2人だけだと広すぎか。」

だって俺の家の部屋よりこっちの部屋の方が確実に大きいし！！
2段ベットと机4個とテーブルとクローゼット4個と棚と冷蔵庫が
あって、まだスペース余るとか広すぎだしこの部屋。っていうか、
この部屋が何百個あるとかどんだけ広いんだよ。この学校は。ホテ
ル並だろ。

「夏休みだろ！！なんか肩が軽いぜ！！」

「お前は最初に課題を終わらせておかないと死ぬぞ。」

「今は課題なんてどうでもいいだろおー。」

「俺は手伝わないからな。」

「今、言っておいた方がいいな。私も手伝わないぞ。」

「俺も。」

「別にいいもーん。明日頑張るから。」

課題とか俺が本気を出したらすぐ終わるし！

うわっ。あの3人真面目だな。もう課題やってる。

んじゃ、俺はベットでゴロゴロしてよー。

・・・うう。

シーンとしたこの空間がヤダ。

読書感想文でも終わらせておくか。

どくろは夏目漱石の坊っちゃんを読み始めた。

・・・あきた。

こいつ、いくらなんでも2階ぐらいから飛び降りたり、自分の親指
切ったりするか？普通。

あ、飯の時間だ。

「食堂行こーぜ。」

「ん？ああ。もう飯の時間か。」

「そうだな。もう先輩達も帰るころだな。おい、渚？聞いているか？」
「聞いている。」

「今日は夏休み前だからバイキングだぜ！！」

「ふふ。ライトさんが喜びそうだな。」

ホント、ライトとハクって仲がいいよな。

っていうかさ、ハクって敬語使うとき女みてー。

ハクに言ったら殴られそうだから言わないけどさ。

食堂に行くと、咲楽とライトが先に食べていた。
咲楽は相変わらずバランスの良いメニューだが、ライトは、ケーキばかりだ。

ライトの周りにはケーキのタワーができている。

「うわっ！どんだけケーキ食ってんだよお前！！」

「悪い？」

「いえ、なんか、すごいなーって思っで。」

「ライトさんはいつもこんな感じだ。」

「見てるだけで腹いっぱいになっってきた。」

どくろ達も自分の食べたいものを持ってきて、6人で騒がしく食べた。

周りから見れば、すごいメンバーが集まっていて近寄りたいが、初日からすごく目立った馬鹿野郎とセミロングの女みたいな男子、短髪で赤マフラーのイケメンに、女か男か分からないポニーテールと、キンキンしている性格の悪そうな三つ編みの女子に、その場に似合わないフワフワとした可愛い女子が仲良く食事をしているのだ。どくろ達の周りで食事をしている人はいない。

むしろテーブルを占領している。

見た目、とても仲が良さそうには見えませんが、どくろ達は実は仲が
良いのかもしれない。

続く

夏休みの始まりと久しぶり！（後書き）

バイキングって楽しいですね。

あとで追加できるって分かっている、ついつい取りすぎてしまうんですよ。

読んでくださりありがとうございました。

なんでもない一日と宿題（前書き）

28話目です。

どくろ…ど 蓮…れ 咲楽…さ ハク…は 渚…な ライト…ら

なんでもない一日と宿題

ピピピピピピピピピッ ガチャ

ど「え？もう朝？時間は・・・まだ5時か。ってあれ！？」
は「どうした？」

ど「何でジャージに着替えてんの！？」

は「え、だってラジオ体操があるから。」

ど「え？」

は「聞いてなかったか？夏休みの間は朝の訓練じゃなくてラジオ体操をやるんだぞ。」

ど「そうだったの！？たく、遙先生つてば、また忘れてるし。」

れ「騒がしいな。・・・どうした？今日から夏休みなのに起きるの早いな。じゃ、俺はもう一回寝るとるか。」

ど「待て待て待て待て。よく聞け。夏休みの間はラジオ体操をやるぞうだ。」

れ「は？」

な「B組は聞かされてないのか？」

れ「そんなの、全然聞いてないな。」

ど「とにかく着替えよう。」

どくろ達は着替えを済ませた。

グラウンドに行くと、人が集まっていた。

ど「やっぱりラジオ体操あったんだな。よかったあ。ハクが教えてくれなきゃ確実に知らないままだったぜ。」

さ「おはようっ！」

れ「ラジオ体操のこと知ってたか？」

さ「知らなかったよ！ライトちゃんが教えてくれたんだよっ。」

ど「あのライトが！？意外だな。」
ら「あら？あたしが教えてあげないとも思ったのお？」
ど「げっ。ライト、居たのかよ。」
ら「気安くあたしの名前を呼ばれたの、初めてよ。」
ど「す、すみません。」
ら「まあ、どうしてもっていうなら、いいけどお。」
ど「（ボソッ）めんどくせえなコイツ……………」
は「ライト、寝坊しましたね。」
ら「えっ！？なぜ判ったんですか？」
は「三つ編みが乱れてますよ。きつと急いだんでしょう？」
ら「……………結いなおしますわ。」

咲楽は蓮ごしにハクと渚に話かけた。

さ「お名前、何ていうの？」
ら「（ボソッ）なに気安くハクさんと渚さんに話かけてんの！？この女！！」
は「えっ。私と渚か？」
さ「うんっ。」
は「私の名前は黒斬ハク。一応言っておくが、マフラーははずせないからな。」
さ「なんて呼べばいい？」
は「お好きに。」
さ「じゃあ、ハクちゃん！！」
は「え？」
ら「な、何でハクちゃんなわけえ！？」
さ「だって、自分のこと私って言うし、顔立ちが綺麗だからっ！」
ら「意味わかんない。こんなの、ダメですよ。ハクさん。」
は「別に、かまわないが。でも、あんまりそういう風に呼ばれたくないな。」

さ「うーん。じゃ、ハク君でいつか。」

ら「そ、それが一番いいと思いますわっ！次は渚さんが自己紹介を
！」

な「細燦渚。」

さ「渚君かぁ。かつこいいね！」

ど「ん！？」

れ「どうした？」

ど「別に。何か咲楽ちゃんのかつこいいの基準が……………」

「テーテーテッテッテッテ テーテーレッテッテッテッテ」

ラジオ体操が流れた。

「ラジオ体操、第一いいい！あああ高校（仮）式いいい！！」

ど「ん！？」

れ「あああ高校（仮）式？」

・

・

・

ど「ぜえ。ぜえ。ぜえ。」

れ「何だこのラジオ体操は。かなり疲れるぞ。」

は「初めてやったが、これはなかなか……………」

ど「俺……………もう無理……………倒れていい？」

れ「好きにしろ。」

さ「きつつーい。これ、毎朝やるのお？」

ら「当たり前じゃない。正直きついけど。きついなら、サボっても

いいんじゃない？」

な「腹減った。」

は「そうだな。食堂行くか。みんなバテてるから、今行った方がいいかもしれない。」

食堂に行くと、ハクが言ったとおり、人が少なかった。

ど「おっ！今日、サバ味噌定食じゃん！！ラッキー！！」

ら「え、サバ味噌？無理よ、あたし生臭いの嫌い。」

は「好き嫌いはいけませんよ。」

ら「うう。分かってますわ。」

どくろ達は端の席に座った。

ハク達の全ての動植物に……式のあいさつをして食事をした。

れ「このサバ味噌、全然生臭くないぞ。」

ら「えっ。本当っ！？」

は「かなりおいしいですよ。ほら、ライトも一口。」

ら「（モグモグ）……不味くはありませんわ。」

は「素直に美味しいって言ったらどうですか？」

ど「うわっ。渚もう3杯目かよ。」

な「美味しい。」

無事に食事を終えて、どくろは課題地獄に立ち向かった。

続く

なんでもない一日と宿題（後書き）

どくろ達の日常を書きました。

ネタが思いつかなかったので、思いつくまでこんな感じになると思っています。

読んでくださりありがとうございました。

課題と絵（前書き）

29話目です。

どくろ…ど 蓮…れ ハク…は 渚…な
よろしく願います。

課題と絵

ど「課題やるぞおお!!」

れ「どうした、いきなり。」

ど「え? なんとなくだけど。」

は「じゃ、私もやろうかな。」

な「・・・俺も。」

れ「流れるに俺もやるか。」

ど「結局全員、課題やるのか。」

れ「俺、絵を終わらせる。」

は「私も。」

な「俺も。」

ど「流れるに俺もだよな。」

全員、絵の具セットを準備した。
大きな画用紙に下書きを始める。

ど「何でもいいんだっけ?」

れ「確か。」

ど「俺、焼肉定食を描くから。」

は「私はどくろを描く。」

な「俺も。」

れ「じゃ、俺もどくろを描く。」

ど「え。」

蓮とハクと渚がどくろの方を向いて、どくろは見つめられながら焼肉定食を描く形になった。

れ「おい、動くな。」

ど「動いてねえし。」

は「動くなよ。」

ど「え？いや、だって蓮が……………」

な「だから、動くな。」

ど「……………描きにくいんですけど。」

シー—ン

沈黙して描き進めた。

れ「俺、下書き終わったから水汲んでくる。」

は「私のも頼む。」

れ「あいよ。」

ど「俺も水汲んでくる。」

な「俺のも。」

ど「うん。」

蓮とどくろは水を汲みに行った。

ど「どんな感じになった？俺。」

れ「すごい感じになったぞ。賞に入ってもおかしくない。」

ど「え？マジで！？後で見せて！！」

れ「ダメだ。」

ど「ええ！。少しくらいいいじゃんかあ。」

れ「ダメだ。」

ど「ええ！。」

どくろと蓮は水を汲み終わって部屋に戻った。

は「ん、どうも。」

な「すまないな。」

れ「どくろ、また動くなよ。」

ど「わかってるって。」

どくろがさっきの場所に座って、色を塗り始めた。

れ「もうちょっと右。」

ど「え？こうか？」

な「あと少し右」

ど「ここか？」

は「行き過ぎだ。少し左。」

ど「ここ？」

「「「そこだ。」」」

また沈黙しながら作業を進めた。

ど「俺、終わったんだけど。」

れ「動くな。」

ど「ごめん。」

シー——ン

ど「ヒマなんだけど。」

は「少しずれた。」

ど「ごめん。」

シー——ン

れ「終わった。」

ど「見せて見せて!!」

れ「っていうか、どくろって絵の才能あるよな。」
ど「蓮に比べたらな。」

続く

課題と絵（後書き）

私、絵って苦手なんですよね。

風景画とか人物画とか・・・。

読んでくださりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8746z/>

高校生活と探し物

2012年1月14日16時56分発行